

瀾^メ滄^コ江^ンデルタ

——あるベトナム参加者の軌跡——

古賀保夫

一

瀬戸内海国立公園に突き出た仏教文化の古里、白砂青松の海岸に富む大分県国東半島^{くにさき}の町、国東町から八キロほど内陸部に入った同町見地^{けんじ}で、いわば優婆塞^{うばそく}とでも表現したような、澄み切った心で農耕にいそしんでいる還暦を過ぎたばかりの人がいる。その人の左眼は日中戦争期の昭和十六年二月、華中大治鉾山付近で尖兵小隊を率いて石畳の道を進行中、敵弾に射たれ失明したままである。農具を手にしている合間には、いまでも傷痕から惨み出る目脂を拭いている。

一眼失明の戦傷とあれば当時の常識として兵役免除になるところだったが、漢口^{ハンコウ}陸軍病院で左眼をくり抜き帰国、治療のあと再び軍務に服し、当時の第五五師団（編成地、善通寺、ビルマ在）別動隊々長を勤めた。この独眼の人物、それは、かつて日本敗戦直後、ベトナム独立運動の核心であったベトナム（越盟—越南独立同盟会 Viet-Nam Doc Lap Don Minh Hoi—民族解放戦のためベトナム各階層の広汎な人民と各少数民族の革命勢力を結集するため

一九四一年五月十九日設立された統一戦線組織。その前年一九四〇年九月二三日、日本の仏印進駐に対しインドシナ共産党は反仏反日帝国主義の下に武装蜂起しつつあった。ベトナムは一九五五年九月発展的解消に身を投じ二年以上、ベトナムと行動を共にした兼利俊英氏の戦後三十六年の姿なのである。

陸士五四期、元陸軍大尉、敗戦時は五五師団一四四連隊で大隊長職にあった。大尉の農耕生活を傍見する限り、この自然に溶け込んだ姿の背後に、敗戦後一身を賭しベトナム独立に駆せ参じた若き青年の銳意は隠されている。ただアジア人の独立支援に応じた自己放棄の情熱、目的に参画した充足感と苦闘を乗り越えたあとの満足感、それによって浄化された悟りとも言いたいものが心身に潜んでいるのが放射されている。

この身命を惜しまずベトナムに投じた時期は一九六〇年末の南ベトナム解放戦線結成前期に当たっている（一九四五年八月十五日、日本敗戦後ベトナム民主共和国誕生間もなく十六度線以北は中国軍、以南は英印軍管理。このあとフランスがインドシナ再植民地化を図り、サイゴンに樹立したサイゴン政権期Ⅱ一九四六年六月一日―五四年六月七日Ⅱとなる。同政権は細分すればグエン・バン・チン・バン・ホアク政権期Ⅱ一九四六年六月―四七年八月Ⅱ、グエン・バン・スアン政権期Ⅱ四七年八月―四八年六月Ⅱ、バオダイ政権期Ⅱ四八年六月―五四年六月Ⅱの三期になる。ついでアメリカ保護下の政権期（一九五四年七月七日―七五年四月三〇日。この期間はゴ・ジン・ジユム政権期Ⅱ一九五四年七月―六三年一〇月Ⅱ、集団軍政権期Ⅱ軍事革命委員会、国家評議会、国家指導委員会による軍事評議会の政権担当期一九六三年一月―六五年六月Ⅱ、グエン・バン・チュウ政権期Ⅱ六五年六月―七五年四月Ⅱの三権下に分けられる。なおインドシナ戦争は一九四六年十二月一九日に勃発している）。このインドシナ戦争勃発前夜が大尉のベトナムとの協同時期であることは、同大尉は歴史の一証言者たり得るだろう。メコンデルタ地帯の体験、これは民族解放戦線結成に至る初期の実相、そこに動く民族と人間の問題、不可解ともいえる人間の動き、有色人種と白人の

問題などの他、時間の流れの前に人間を無慈悲につき放す歴史の非情性さえ感じさせる。

兼利大尉がベトミンに投じた日は日本敗戦時の昭和二十年も末のある日であった。そのころ大尉の所属部隊はカンボジアの首都プノンペン¹の北々西約七五キロ、プノンペン―バンコク鉄道沿線にあるロメアス (Phum Phsar Rô m'as) 町に駐屯していた。同連隊はビルマでアキヤブ作戦を終えたあと、息つく間もなくペグー山脉越えに連合軍の包囲を脱出、仏領インドシナ (当時) に入り、ロメアスで敗戦を迎え、以前、フランス軍が使用していた建物の一部に移駐した。

敗戦時、カンボジアではソン・ゴク・タン首相が独立維持 (戦争末期に独立を宣言していた) を国民に呼びかけたが、大尉の駐屯地では、さまで混乱は生じなかった。日本敗戦を機にベトナムでは反仏運動の火の手が上がり一九四五年八月政権奪取のスローガンの下に全国蜂起の鯨波が押し寄せ、ベトナム南部ではサイゴン (現ホー・チミン市) 八月二五日蜂起。以下日付けは蜂起日)、サイゴン南部ミート (八月二六日)、ベンチェ (同)、ビンロン (同)、ビエンホア (八月二五日)、カンボジア国境のチャドック (同)、ハ・ティエン (九月初め) をはじめロンスエン (八月二五日)、サデック (同)、カントー (八月二六日) など二十六箇所では青年前衛隊の「独立」「自由」「祖国」を合言葉としたデモ行進の中で、いわゆる「八月革命」が成功し、親日政権は革命軍に打倒されていた (『資料ベトナム解放史』四〇五頁。一九七〇年十一月労働旬報社刊) (ベトナムはフランスによりトンキン、アンナン、コーチシナに三分割されていた)。

この蜂起で最先頭に立っていたのは民族独立の雄ホー・チ・ミンの率いるベトミン (越盟) であった。ベトミンが決定的時機に決定的行動がとれたのは、中国雲南省昆明に開設していた、幹部養成学校で組織準備したインドシナ共產党 (一九五一年にベトナム労働党となる) を指導核とし、これに超党派対仏抵抗革命集団を結成し一挙にベトナム

全域に旗を掲げ、忽ち全土の政権奪取を図った結果だ、とは日本軍捕虜収容所での話だった。ところが一方「中国国府軍は雲南―ラオカイ―広西―ランソンを経てベトナムに進撃している」（桜井・石沢「東南アジア現代史Ⅲ 山川出版」）のである。この間「ハノイに至る一五〇キロの農村を荒し」（同）ている。このことから中国からは国府軍と共産党系の二系列の軍が南下し、これが混乱し判断を狂わしていた、とも思われる。しかも敗戦によって日本軍兵器は北部に進駐した中国軍によって、殆んどホー・チ・ミン側に渡され、これが後の革命進展に役立っている。雲南省といえば連合軍が北部ビルマに反撃したときの兵士補給源でもあり、ここに雲南省の地理的条件と人的補充点、さらにベトナム革命の発進地点として、種々の役割を担っていたことが殊更に浮上してくる（一九四九年毛沢東軍がベトナム国境に着いてからベトナム情勢が変化し、北ベトナムの対仏闘争が中共の軍事的、経済的援助で一変したことを併せ考えると、よしベトナムの指導者が中共の関心を疑念の眼で見えていたとしても、その影響力と協同関係が覗われる）。

さて北部ベトナムでは昭和二〇年、日本敗戦月の八月一九日、ハノイで越南独立同盟が越南共和国を発足させ、またアンナンの首都ユエ、コーチシナ首都サイゴンでは人民委員の結成があり都市行政は人民委員会の手に戻していた（日本は一時ユエに越南帝国を創った）。都市行政の把握は越南共和国政権であり、その政権中心にトンキン、アンナン、コーチシナなどの各州では人民委員会を支持し、越南共和国は各州政権との連合政権型であった。しかし一九六〇年一月一日ベトナム共和国成立のとき、この連合性格は消え統一と社会主義国家を目指すことになる。

また同政権はインドシナ共産党、越南国民党、同盟会などの民族政党をはじめ社会党、カトリック団体、仏教団体、各種青年、婦人団体などの支持があり、ベトナム独立獲得を目指す民族統一戦線に他ならず各団体に日本敗戦を機とした独立機運は燃え、ベトナムに応じたのであった。かくて一九四五年九月二日、一つのベトナム民主共和国が誕生した。ところがこの独立統一国家は長続きせず十六度線を境に中国、英印軍に分断され、さらにフランス（ド・

ゴール政権）はインドシナの支配回復を企図し、軍隊を派遣した。サイゴン（現在のホー・チミン市）はフランスに占領され仏軍のインドシナ掃討作戦が開始された。サイゴン政権は未だ樹立されていなかったが、この頃インドシナ全土では、約五十都市がベトナム民族戦線の革命政権下にあった（フランスは一九四六年三月五日、北緯十六度以南を掌握）。

この状況から連合軍の一員であったフランスはベトナムの反仏革命に対し、いまは敗者の位置に転落した日本軍に対し、ベトミン討伐を要請した。敗者への要請は実質的には命令であった。フランスは日本軍の力によって独立の芽を摘み取ろうとしたわけである。昨日の敵と手を結び反仏粉砕を企図した。大戦は終結していたのに、敗軍の駐仏印（インドシナ）日本軍は他民族の命令で他民族を制圧するため再び銃を執る羽目に陥った。その命令が兼利大隊に下った。このことはベトナム人が日本人の戦争責任とは異質な、独立という敗戦意識をもっていたことに結びつく。

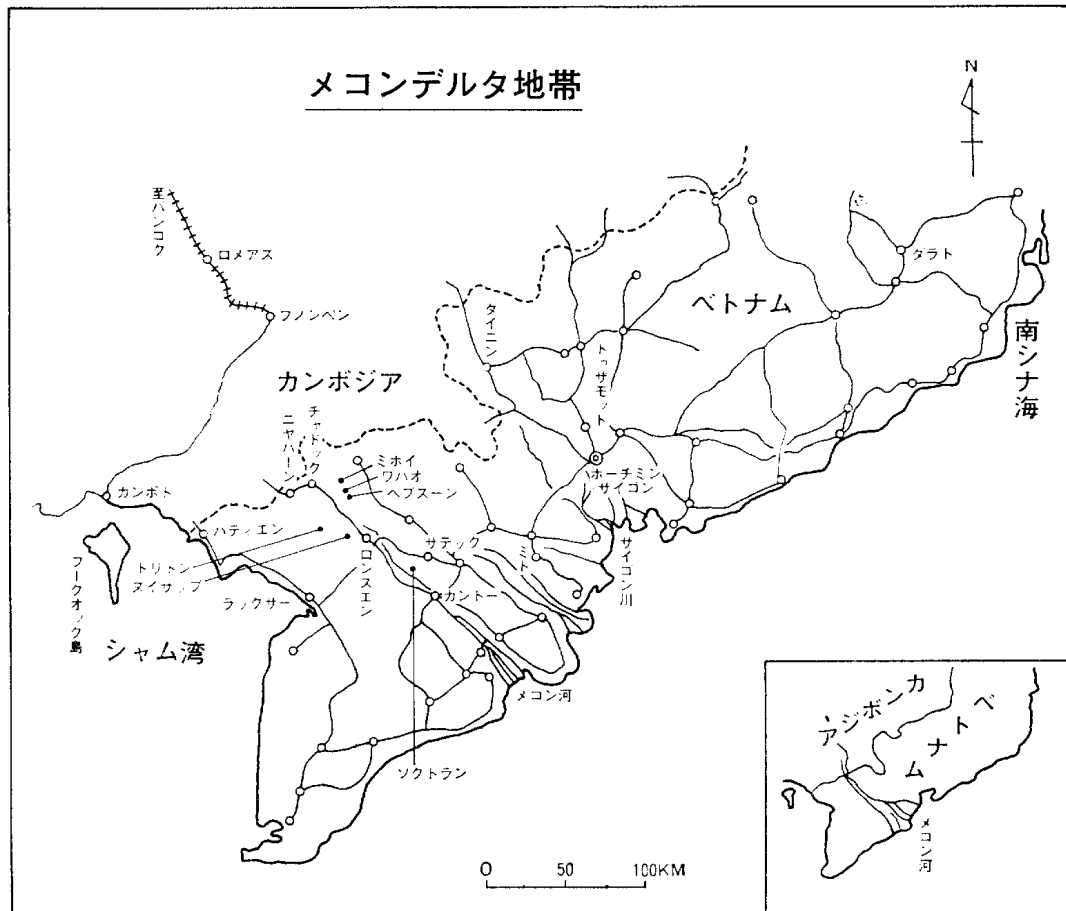
大尉は一コ大隊を率いベトナムと戦闘を交えねばならなくなった。だが戦争終結によって命を長らえた将兵が再び弾雨下に進む気になれるものではない。討伐地は直接ベトナムでなく、まずベトナム軍の後方基地視されていたカンポトとなった。プノンペンから約一七〇キロ南のカンボジア領内であったが、兼利戦闘隊は出動したあと無疵で帰隊した。帰隊した兵士は「いまさら死ねない。また殺したくない。鉄砲をずっと上に向けて射ただけだ」「ベトミンも相手が日本人と知って真正面から攻めなかった」と語った。ベトミンの兵器が貧弱だったことを考慮しても有色人種同士間に微妙な心の配慮があったこと、無駄に死を招くことを避けるという証拠といえた。ベトナムは白人支配に対する嫌悪感、反差別感を日本軍には、さまで示さなかった。

もとより下命者の仏軍は戦闘後、戦果の確認を忘れなかった。これに対し大尉はベトミンと事前打ち合わせを完了、ベトミン使用の竹槍、棍棒を用意して貰い、戦闘後にそれを戦果として仏軍に提示し納得させた。当時ベトミン

の武器は竹槍、棍棒が多く、近代兵器は南部ベトナムまで渡っていなかったからそれで済んだ。ところで一方、この討伐は両有色人種間に近親感の交流を生んだ。そうしてこの日越民族同士の理解が別な情感を醸し出した。

それは敗戦後の収容所では、いつ帰国できるか見当もつかめずいわば虚脱心理が充満し将兵の心には無力感、虚無感がしのび寄っていたこともあり「一度は捨てた命だ。ベトナム民族独立に、この地で力を貸すのも新らしい有意義な人生ではないか」という心の変化であった。連合軍による武装解除は未だ実施されておらず、日本軍には多少の戦闘用物資が貯えられていた。また今になって考えると、明らかにデマであったが、まことしやかに囁かれていた風聞があった。見通しもつかぬ生活環境下で、理性を失ない勝ちな時に、このデマが却って希望的観測即現実化されて伝わった。「一ユ中隊が全員完全武装して乗船、メコン河を下ってベトナムに投じた」「ベトナムに参加すれば日本軍時代の階級は一職位昇格し兵は下士官、下士官は将校、少尉は少佐の身分で待遇される」というのから、さらに胸を揺り動かすもので「あるベトナムが参加勧誘に来ている」と語る者もあった。加えて「そのベトナムはもし参加して貰えば一生、家庭的面倒を見ると断言した」と言ったものであった。

こうした流言蜚語とは全く別な角度から兼利大尉はベトナム投入を決意していた。この決意に至るには人に言えぬ苦悩があった。日本軍敗北という事実は陸士出身、職業軍人としての大尉にとっては応召者と違って二、三倍の痛打であった。それまでは軍人の身として祖国のため民族のため一身を抛つという人生観に一点の迷いもなかった。大尉が立身出世型の軍人でなかったことは激戦地を物ともせず駆け巡ったこと、兵をかばい、ある時は兵を休息させ自分一人で敵情偵察に行ったことにも現われていたし、部下将兵からは独眼竜隊長の別称で親しまれていた。その本人が悩んだことは、これまで軍人教育を叩き込まれ、生活して来た人間が、平和甦り民主々義国家へと大転換した社会で、いかに生き得るか、という模索と懷疑であった。



大尉は地元の中学（旧制国東中学）を卒業しているから戦後の歩みにも適応性はあると第三者は見ているのに、陸士出身を負担視し日夜苦悩した。同期生に藪田大尉がいたが二人の考えには距離があった。藪田大尉は苦しんではいたがなお楽観的であった。というより、努めて楽観的になろうとする考えの中に浸っていた、とも見られた。兼利大尉は真剣に考えていた。そして最後に胸中に湧いたことは「今次の戦争は白人支配の東洋否定の動機から出たものに他ならなかった。自分が命を挺したのも、そこにあったのではなかったか」という自問自答が「白人からの解放、これは眼前のベトナムの反植民地闘争ではないか。この反侵略戦争に身を投ずることは、これ迄の自己行動を生かす同一線上の行動となる」という転換論となった。この間、日本軍隊（旧軍）そのものへの反省も重ね尽した。自己を偽ることを避けたかった。そうして選んだのが、反植民地闘争を続けているベトナムへの投入であった。

二

収容所では敗戦後二カ月ほど経ってからベトナム語（安南語）講習が実施された。二カ月近くの講習だったが、開講は「五年間は内地に帰還できないことになった」という理由から、自活の手段として始められたものである。プノンペンから十七、八歳のベトナム人を講師として迎え椰子の葉葺きの中小屋を講堂とし一〇〇名近くが連日受講した。大尉は常に前列に座を占めて学んだ。ベトナム語は六声の言語で中国語の四声に比べ発音は音楽的に響く。十四母音、二十二子音による言語だから発音に多様性がある。熱帯の熱さの中で軽い震動感を交えた発音が交わされた。大尉は「まるで中学生（旧制）に戻ったような楽しさだった」といまでも当時を述懐しているが、こうした環境は捕虜という身分、収容所という囲みさえ忘れさせた。収容所内では軍隊の秩序は保たれ週番士官制（部隊内の管理、監督責任制度で各中隊付将校が週番制で担当）も平常通り実施されていた。

自由な行動には制約があったが許可を受ければプノンペンにも出張できた。また当時の通貨ピアストル（日本の円）で給与が支給され酒保も開かれた。だが大尉は酒保にも進んでは行かなかった。中学（旧制）卒業時、陸士に合格し国東町の評判になった時の欣喜雀躍とは正反対の憂いと暗念があった。

この講習の席上で知己になったK中尉には自分の苦喪と真意をさらけ出していた。K中尉は「陸士教育が全てマイナスになるのではない。活用一つでしょう」と言っていたが、それも当人には通り一遍の単なる響きに終わっていた。

思えば日本は白人をアジアから一掃し、白人帝国主義の息の根を取り払う、という大義名分の下に戦争を始めたのだが、その理由の如何を問わず、他民族を対等に見ていなかった。北部ベトナムでは食糧調達、稲作転換により餓死者約二〇〇万人（石井米雄「世界の歴史14―インドシナ文明の世界」三三一頁。昭和五四年四月、講談社刊）（一説に二〇万、

三〇万、一〇〇万人とまちまちながら、その水稻作付面積から推して北部ベトナムの発表が正しいと推定される。小林昇「私のなかのヴェトナム」二〇六頁―一九六八年一月、未来社刊―にも同様数字が挙げてある）を出したことなく、独立を与えるどころかフランス帝国主義を引き継いだにすぎなかった。「独立」は虚像であり軍靴で他民族を占領した。独立と占領のこの二律背反は出征した者の頭の中には、さほど意識に上っていなかった、と言ってもよかった。これこそ日本人の思い上がりが生んだ支配者意識でもあった、と言い得よう。

侵略する側の加害者感覚は強者の論理が生んだものだから、被害者の苦痛は別次元のところにあるのが通常である。だが、敗者に転落した時に、それを否応なく味う。戦争を呪いと見るか、苦渋と感ずるか、必要悪と解するか、まちまちだろうが、事実は事実が証明する。大尉は殊の他、自分に厳しかった。そして在来の信念が足元から揺いだ。そして白人植民者を撃退する側があるなら、その側に一歩足を踏み入れ、我れと我が身を挺しようとした。ベトナム民族との同一性への指向へと転化したのだった。共存共栄といった侵略者の美言と別に、アジアの目覚めへの自己であった。

日本を離れたとき、すでに帰還は期していなかった身を思えば、この事で死ぬのも悔いなし、と決断した。

収容所からの脱走時機は日本軍の武装解除前でなければならない。また以後の活動を考えれば所属師団司令部に公然と、自分の意を表明しておく必要があった。ついでベトナム語が必要である。これはベトナム語講習の折、講義担当将校が作ったペン書きのザラ紙パンフレット「安南語（ベトナム語）日常会話―日越編」を譲り受けた。

昭和二十年十二月、武装解除日の朝、大尉は収容所正門から平然と脱出した。それより二カ月前、独立を呼びかけていたカンボジアの首相ソン・ゴク・タンは対敵協力を理由に英・仏連合軍によってサイゴンに連行されていた。ベトナムの対仏蜂起の波及を懸念した処置と言えた。収容所を去るに当って万感胸に去来した。これまで生を共にした

上官、同僚、部下との別れとなる。人間交際では生死を分け合った戦友が最も信じ合える仲になる。その仲間との別れは一切の過去との別離を意味した。

空には熱帯の太陽が朝から燃えていた。後にした収容所も武装解除後の明日からは一変する。酒保も除去され給与もない生活となる。連合軍の命のまま労働へ狩り出されるだろう。その中で復員までの歳月を送る部隊の運命をそれなりに頭に描いてロマス駅から司令部所在地プノンペンに直行することにした。これより前、大尉の決意に同調した連隊の山下中尉、庄野少尉、岡兵長は先発しプノンペンにあった。駅近くの阿片吸飲常習者の屯する椰子葉葺き小屋も馴れ切った一風景に見えた。列車は二時間近く殺風景な開豁地の直線コースを走ったあと水田地帯に入った。鉄路が直角に近く左に曲って間もなくプノンペンに着いた。

駅から徒歩二十分ほどの距離にあった師団司令部に赴いた。司令部は縁の芝居に囲まれた鉄筋のビルに在った。大尉は斉藤弘夫中佐参謀（陸士三七期）に会って意図を表明した。斉藤参謀は先発者から大尉の計画を聞いている。「否」という返事はなかった。いわば師団容認のベトミン参加となった。

そのころベトナムの反植民地闘争、対仏戦に自からの意志で脱走した日本軍将兵も多く、脱出は半ば認められていた。野戦病院の軍医は予備役将校のY中尉に「もし脱出するなら『戦死』の公報を私が書いて提出するから安心してベトミンに加っていいですよ」と言い含めていた位だから、脱走は公然の秘密になっていた。一方、ベトミンでも受け入れを了解していた。これは僅かでもよいから日本武器を欲していたことにもよった。また仏軍要請によるベトミン討伐を機会に両者間の話し合いが通ずるようになっていたことも効いていた。だからといって、ベトミン参加は物見遊山ではない。日本への帰国意志の拒否と同時に弾丸の下をくぐることも計算しておかねばならない。ただ自己の意志による行動という点が自分を勇気づける要素であり、情切にして事急の心情が流れていた。

師団参謀部もベトミン参加心理に理解を示していた。そうして騎兵連隊の石井少佐が大尉と同一行動をとることに
なり、ここで一行は四名になった。折しもプノンペンには日本軍兵器が残積されていた。石井少佐は司令部にあった
ベトナムに関する政治、経済関係書を持ち出した。一行はオートバイ、トラック各一台に乗りプノンペンから直線距
離にして約一八〇キロ南、カンボジア国境に近い海岸沿いの町ハティエンを目指すことにした。

出発前夜、司令部では一行四人の壮途を祝願して壮行会を催してくれた。この間、同行を志願して「仲間に入れて
呉れ」と申し込む兵隊が続出した。これは一応断ったが後になりベトナムで会うことになる。

翌日、一行を乗せた車は二日間南下しハティエンに着いた。同所は第五師団輜重第五連隊の駐屯地であった。
華僑が定着した人口約二万の町でメコンデルタ開発着手の町でもあり付近は胡椒の産地として知られている。

一行は師団からの連絡に従い南ベトナム軍南総司令部(司令阮平^{グエンビン})に赴いた。このことは日本軍とベトミンと暗黙の
了解があったことを物語る。同司令部では南ベトナム各省選抜兵を動員しておりアンナン出身者が眼についた。それ
に混って日本の三八式小銃と弾薬を携えた逃亡日本兵が約一〇〇名集っていたのに一行は驚ろいた。

大尉一行の入越のあと、かつて散髪屋を営んでいた、というベトナム人ウィン・ゲン大尉が加入した。到着早々、
司令部では兵器奪取のためのプノンペン攻撃が立案された。攻撃計画は大尉立案の戦闘指導が採択された。このとき
ベトナムに駐留していた日本軍第二師団(通称勇兵团)参謀部は大尉一行に好意的態度を寄せてくれたため、兵器奪
取計画は具体性を帯び成功の確率は高くなった。越南軍は兵器を渴望していた。とくに日本軍の山砲(九四式、口径
七五ミリ、最大射程八三〇〇メートル)の有効性を認め、これを無性に欲しがっていた。八月蜂起当時二〇〇〇―三
〇〇〇名と言われていたベトミンに近代兵器は皆無に等しかったのである。

兵器奪取計画ではプノンペン市内で直接行動により電信電話庁舎を攻撃したあと小高いプノンペンヒルからスピー

カーによって市内攪乱の放送を続け、その騒ぎに乗り日本人に偽装したベトナムが兵器を奪取する段取りであった。兵器量はベトナム二―三師団を装備させるに十分であった。さらにインドシナ再侵入を図ったフランスは兵器をメコン河岸壁に積み上げていた。この両国の兵器で装備したベトナム軍を中核とした軍を編成し、ベトナム独立への大躍進を目指す方針を樹てていた。

ところが、この兵器奪取計画がフランス側が放っていたスパイによって洩れてしまった。急を聞いてフランスの巡洋艦がベトナム岸壁に横付けされ攻撃側に威圧をかけた。

兵器奪取側にはカンボジア・シハヌーク権力下の経済大臣パクチンが亡命政権の長老とし大尉一行側にいたので、万事は好都合に運ぶ筈であった。それがスパイの情報網にかかる不首尾もあって計画は水泡に帰した。大尉はハティエンでベトナムに日本軍の手榴弾、小銃などを分与していたが、それは物の数に入らなかった。

三

ベトナム攻撃は失敗に帰したが、フランスの压制下に苦吟していたベトナム人は独立を長期かつ困難な闘争と覚悟していたので、その位で挫けるものではなかった。といってもフランスの保護国から昭和二〇年三月九日の日本軍の制圧クーデター、ついで半年経って再び連合軍、フランス軍の制圧といった目まぐるしい社会変転を味ったベトナムの青年達はこの混乱の中で自分の去就を決めねばならなかった。いわば劇的な人生に否応なく直面していた。

入越した大尉が感じ取った南ベトナムの人心はイデオロギーには無縁で、それよりも虐げられた民族が対仏独立のため闘うということにあった。また同じベトナム民族といっても、北部と南部では、その心理に微妙な差があった。この差は戦争による被害が北ベトナムが大であったことに帰着できよう。「トンキン地方……小作人年貢を上回る数

量を割り当てられ……」(亀山旭「ベトナム戦争」一九四頁。「岩波新書」一九七七年三月刊)、「北ベトナムでそれ(中国、比島、ビルマなど)にも劣らないほどの犠牲を民衆に及ぼしていることは、あまり知られていない」(丸山静雄「ベトナム解放」二四六頁。「朝日選書」一九七五年八月刊)ことを計量しなければならない。

ベトナムが入越した大尉に通訳として配属してくれたベトナム人陳文買は阮司令的一幕僚の言として「北部は土地狭小、耕地も狭く人口は多く、トンキンだけでも九〇〇万人もいる。気象条件も穏やかな貿易風が吹く南部に比べ厳しい。南部はメコンデルタを控え豊富な農作物があり、富裕階級の子弟はパリ留学をする。文化的にも南北の差があり南越人の心も温和になる。だから闘争心は北部が強い」と説明していた。

ベトナムの結成はフランスに留学した青年にとっては深刻であった。彼らが学校で習得した西欧的な教養は戦後の変化を異質的なものとして受けとめていた。日本敗戦後、嵐の如く押し寄せた共産主義についても批判的であった。しかも革命か反革命のいずれに味方するか、独立か植民化のいずれを採るか、という差し迫った選択が要求された。「フランスの大学を以前に卒業した技術者や知識人は、一定水準の教養はもっているが、政治についてはほとんど何も知らない(われわれはこれもまた非難できない。……八〇年間に帝国主義者は一度たりともベトナム民族を政治的に教育しようと考えたことがあっただろうか)」(前掲資料Ⅲ三五〇頁)という植民地の事情を省みる必要がある。ただこれら青年も民族解放への熱情は激烈であった。この独立願望が全民族共通であったのを看取っていたのが胡志明(ホー・チ・ミン)であり、胡(ホー)はインドシナを「遅れた社会」と規定し全民族の力を結集するため、その共同綱領も低度に押えた。これは胡が実践家たる条件を具有していたからに他ならない。

一九四五年八月一九日越南共和国がハノイで誕生したのだが、この政府がトンキン、アンナン、コーチシナなど各州の支持を受けていたのは、この民族独立が基盤となっていたからである。また各州の主体性を尊重する政府であ

る、と見なされていたことにもよる。一方、南部にはホー・チ・ミンのような優れた組織者がいなかった。

この独立希求充満の息吹きに囲まれた時、敗戦まで他民族の支配を嘗^なめていなかった日本民族の一人である大尉の心底には独立念願で一致した民族心に言葉で表わせぬ精神の美しさが感じられた。大尉がハティエンで会ったベトナム兵士は年齢十七、八歳の若者が殆んどで、二十五歳ともなれば中堅幹部クラスとなっていた。

ベトナム兵士の遊撃訓練場は隣国カンボジアのプノンペンにあった。これは両国の対仏共通意識の連帯ともいい得るもので、訓練を終った兵はベトナムに帰っている。その兵士の生活は質素そのもので飯は握り飯一箇、イモ類が主食だった。またタロイモはジャングルにも自生するから、遊撃戦では恰好の食糧となっていた。さらにそれぞれ各勢力区があり、その勢力区内で安住していた。

ベトナム人は「日本は一応フランスを追っ払った。独立達成の見通しを与えてくれた」と親しげに語りかけていた。大尉は白人無敵の神話破碎の言葉を聞くと、カンボジアの小都市に設置されていたプールなど、その施設場に「白人専用」whitenen onlyと麗々しく掲げられた掲示板を思い出した。この東洋・有色人蔑視は抜き難いまでの白人世界観・人種観であったし、この掲示板を取り除いた日本の処置にも、こうした感覚を生じさせるものがあったと確信した。だが、これもベトナム全人民共通の声とは思えなかった。日本による「独立」付与は主権者がフランスに取って代っただけで飢え死した死者を思えば偽独立であった。ただベトナム人は急進的な観念の虜にはなっていないかった。ベトナム全土を見た場合、たとえば南ベトナムの三分の二は山岳民族で、二十八種族約二百万人に上り、その向背が重視されていたほどで、主義は別問題であったからである。だが対仏憎悪は共通して、更に増幅した。

この憎悪は無理からぬことである。入越して大尉の耳入ったのはフランスの圧制、白人横暴のそれであった。仏領インドシナ時代のベトナムの財政収入には地租とともに、人頭税があり、十八歳から六十歳までは、その社会的地

位、資産に関係なく一律に課税されていた。一日十二時間労働で七一〇セント（通貨単位一ピアストルの十分の一）の収入者に対する人頭税は年二・五ピアストルであった。さらにゴムのプランテーションでは、現地労働者に対し逃亡を許さぬ罪まであった。ユーチシナの大多数農民は水田小作人に堕ちていた。かくもこの圧制が民衆の生活の隅々に浸み込んでいることは、個人の人間凝視、自覚が民族独立指向となる他ない。圧制者と大地主・権力者が手を結んでいる限り、独立は反帝反封建反買弁とならざるを得なかったのである。資本と土地所有の二大利益集団との闘いであった。存在が意識を決定していた。

アンナン人は魚獲りが得意だった。網の目のようなクリーク、またフランス統治時代の開発運河はナマズ、エビを始め小魚の宝庫となり、彼らには魚獲りは一種の遊びとさえなっている。獲った魚でガチン（小魚をすりつぶして作る香辛料）を作って大尉の食卓に乗せてくれた。総じてアンナン人は感情が細やかで楽天的だった。

プノンペン攻撃失敗後は、ハティエン郊外の村落で生活していたが、そこでベトミンに迂回作戦の要領、機関銃による攻撃を教育した。また幹部教育に当たった。ここで長野県出身で陸士五五期の田村少尉が参加した。

大尉は遊撃戦には熟知していた。馴れていた。昭和一九年二月、所属の桜井兵団がビルマで第二次アキアブ作戦を策定したとき、大尉はブチドン（ベンガル湾に注ぐナーフ河口から約二十二キロ東方）に進出した折、特別訓練を受けた二コ小隊を率い独立隊長となり、情報収集、戦闘を完遂していた経験が物を言った。

入越してから、いつしか年は明け三カ月近くも経っていた。安南語にも馴れて来た。服装も安南人同様にした。それも極く自然な姿に映った。訓練したベトミンが活躍するのは頼もしいことであった。農民はゲリラ要員となっている。ゲリラ（ベトミン）訓練に日を送った。主として幹部教育であったが、ゲリラであるため、幹部教育でも事は足りたわけである。農家は一本の釘も使わぬ椰子葺きの家であり、室内にはモミ入れがあり、裏には竹林がある。これが

平均的な家屋構造であった。こうして農民と共同生活をしている間にフランスの後押しでサイゴン政権が樹立されていた。しかし、その支配権は都市だけで農村はベトミンの勢力下にあった。そこを根拠地としたベトミンは軍隊をアンナン、コーチシナに送り込みゲリラ戦を推進した。

ベトミンはハティエンを中心に場所を次々と移動する。移動が常態であった。一行もそれに従った。ベトミンの各中隊には二名ほどの政治委員が編入され共産党員が隊員の監察役を勤めていた。その委員は北ベトナム政治綱領に忠実だった。情報の伝達は予想を超えて行き届いていた。それに応ずる組織があったからである。こうしてゲリラは農村を拠点として執拗に続行された。ゲリラは農村では農民青年、都市では全階級の青年によっていた。それに何よりもゲリラは土地勘がなければ活動できないから、ゲリラ主体はその土地出身者となる。

政治委員の中には、たどたどしいながらも日本語が話せる者もいた。彼らは「コン（Con—共の意）サンシュギハイイデスネ……」と語り掛けていた。その眼には共産主義に対する憧憬が燃えていた。それに世界情勢の分析にも達者で、対日中共の輝かしい勝利を喜んでいたし、中共遊撃戦の資料も手にしていた。

政治委員は中隊単位のみか、各所属枝隊にも直属の政治委員が配置されており、毎朝、かつ必要に応じ集合し野外で相互に連絡し、訓練に励んでいた。もっとも枝隊といっても正規編成したものでなく三〇〇名そこそこ程度で、各枝隊まちまちであった。それに、もともと正規軍でなく、対仏レジスタンス時代からの組み合わせとも言えた。最大単位で大隊であり、これも概数三〇〇名未滿が殆んどで、一コ枝隊は旧日本軍の一・五中隊の人員であった。これが後に連隊、師団（約三、〇〇〇名）となる。それも当初は正式な編成というより村落単位になっていたから、いわば自然的であった。最小単位は班で、これが日本軍の分隊に当っており班員は一〇名内外と推量された。根拠地が農村だということは農村が独立と解放の根城になるのに何の不思議はない。

ベトナムの行政単位は省、県、村、部落で五——〇部落が一村を形作っていた。部落はクリークで囲まれた形で、また木の垣根に囲まれ竹藪に抱えられたようになっており、一村一村は自治機能を保有し独立的性格を形成している。対外的には一村が共同的に事に処し、自衛的機構の下に生活していた。この特色がベトナムが「蟻」といわれながら大国の「象」に勝ち得た根源に他ならなかったのだ。

解放独立への途として北部は民族主義革命から社会主義革命へ、南部は民主革命段階を目指していた。双方とも解放独立は共通しており、この解放型は日本敗戦直後の八月革命がその原型でベトナムでは、政治闘争と武装闘争の統一結合であった。拠点は各部落で、それが互いに連けいしていた。

この結合こそ特長的なもので都市と農村の結合関係に及び、農村による都市包囲の中共型とも違っていった。もとより大尉がベトミンに参加した時期には、このような定式が確立していたかどうか、また鮮明なモデルとして当人に提示されてはいなかった。ベトミンは大尉一行を、むしろ軍事的役割のみの投入者、味方と受け止めていただろうからである。しかし、この独立解放への戦略戦術の具体的内容、農民（人口の約九〇パーセント）との関係を考慮すれば、この頃すでに以上のような定型——農村が戦略的陣地の基盤であった、ということである。一方、蜂起の成功にはハノイ、ユエ、サイゴンの三都市が決定的役割を演じていた。にも拘わらず大都市プロレアート指導下の革命というソヴィエト型には類していない。レーニンの定式も当てはまっていなかった。ここに都市における蜂起と農村における闘争の結びつき、つまり民族人民民主主義革命というベトナム独自の路線が定着していたし、この方式によってこそベトナム解放戦が存続し得たのだった。この中大尉は生活していた。

大尉はしばしばディン（亭）に足を運んだ。自治組織の中の村民集会所で、安南服を着て心身ともベトナム人になり切った気に浸った。そこで村落のゲリラが地区小隊を編成し、それが矢面になって戦っている姿を知った。同時に

それは権力が農村に移っている証拠とも言えた。農民と溶け合って暮している中に、この日本軍人を受け入れた理由は、武装蜂起以外に勝利を得た革命はないこと、武装が必要であること、日本軍参加受け入れは、武装闘争上の必要性にあったこと、などが呑み込めた。実は大尉がベトナムに投じた頃の一九四五年一月一日、南部ベトナムの抵抗区は九区とし、軍事訓練によって新軍事組織編成が実施されることになっていたのであった。その頃ベトナム人の抵抗組織はシロンで戦略会議を開き、南部を九抵抗区に分け軍事、政治両教育による軍事組織が決定され、抵抗細胞はデルタ農村で活動することになっていたことと思ひ合わせると、大尉の足跡はこの戦略に連動していたことになる。ベトナム組織は本部の下に北・南・中部委員会があり各委員会は省・県・区・郷委員会に系統化されていた。抵抗は農村が拠点だった。村は軍事的部門の重要な役割を担っていた。これが後々のインドシナ解放の土壌となるものであったのだ。

大尉が注意して観察していると、カンボジアから集まった日本兵の受け入れ地はアンザン省ロンスエンであった。ロンスエンはメコン河支流ティエンサン川に臨むメコンデルタ最西部の農村地帯で、ハティエンから直距離にして一〇キロ東方地点に位していた。そこではベトナム軍が二〇〇―三〇〇名定住し脱走日本兵との合同訓練が統合実施されていた。

大尉は、この間ハティエンでベトナムを訓練していた。幹部教育で、遊撃戦における指揮、命令、連結など、かつてビルマのジャングル戦の指揮方法もとり入たが日本軍の作戦教典だけでは物足りなかった。というのは、日本陸軍の教典は「作戦要務令」だったが、昭和十三年に軍令陸第十九号とし制定された要務令に明示された森林戦の項目は、第二部第八編第三章「森林及住民地の戦闘」に述べてある、僅か七、八項にすぎなかったからである。日本軍が熱帯地方の密林で、大規模な作戦を繰り返したのに、その配慮のない作戦指導書であったのは、この種作戦を予想し

ていなかった事による。これは旧日本軍の南方熱帯作戦が余りにも粗雑な計画であった一証左であり、また在来の作戦で間に合うと単純に思っていたのにもよる。だから密林戦では、日本の作戦要務令は無用の教典とまで批判され權威を失っていた。実情を無視し地図の上だけで駒を動かしていた図上戦術にとりつかれていた欠陥であった。ただジャングル内での戦闘体験が教範たり得た。日本の作戦教程は密林中では通用せぬ時代遅れとなっていた。だから大尉の指導は自己体験に作戦要務令教育で叩き込まれた別な部門を併用させた。この場にラッパ手がいたのは場違いの感で驚ろかされたし苦笑さえ洩らした。ともあれ、この併用した要領に則して教育を進めた。

それは例えば指揮と連絡、斥候のあり方、行軍中の前衛、側衛、後衛の役割、さらに一般的警戒といった作戦要務であった。自国内で戦うベトミンにとっては舎営、露營など、日本式にくどくど説明するまでもない。しかし損害を少なくする建前に立てば攻撃の準備、夜間攻撃要領、退却要領、または部隊間の連絡協同は必要であったし補給の重要さを知悉することも捨ておけなかった。この補給ではビルマにおける欠乏状況の生活が最も即物的な教育材料となり活かされた。

また軍隊の組織については戦闘の序列、区別などを通じて教える事にあったが、この点では戦闘即教育、教育即戦闘でもあった。こうした面での実際指導は幹部教育として行なわれたが、連絡については、すでにゲリラ間の伝達を見る限り目を見張るものがあつた。ベトミンの移動連絡がそれであつた。移動を常態としていた当時のベトミンでは次々と位置確認と通達を必要不可欠としていた。この通達はベトミンの兵士が一夜にジャングル内を四〇―五〇キロ走るのは雑作もなかったからこそ果たし得たのである。クリークも、渡し木の丸木をはねるようにして難なく渡る。それも完全武装の身体で飛翔するように駆けて行く。また粗食に平気だった。密林内で茂る草（ジャングル草）でも人間が食えるものは何でも食用に供した。

ハティエンとその周辺でベトミンの幹部訓練を続けたあと大尉一行はタイ湾に面したキエンザン省のラックザーに移った。もう日本敗北後一年経っていた。以前、収容所で起居を共にした所属部隊はサイゴン（ホー・チミン市）東方のサンジャック地区に移り、連合軍の使役に狩り出されたあと昭和二十一年五月末になって復員し始めていた。

これより先、大尉はロメアス収容所で同居していた藪田大尉に近況報告の便を飛脚に托している。その文体は冷静、字画はくずれず坦々とした文面で、藪田大尉は、その筆跡から大尉は初期目的の途を歩いている、と推し測った。その時、藪田大尉は、この依托便を指名通りに宛先に届ける連絡飛脚便を持つベトミンの網の目のような人海の強さに心打たれた。

またこの連絡便は大尉がベトナム人に信頼されている何よりの証拠と受け止め安堵した。

移動先のラックザー東南デルタ地帯は解放軍の基地となっていた。移動に際してはベトミンが舟で運んで呉れた。音もなく滑る小舟はベトミンの足であった。

ラックザーの周辺は水田が多かった。クリークは四方に通じている。海辺は静かで海水は透明、砂浜近くにはフランス人の瀟洒な別荘が点在している。ベトナム人は、ここでも魚を料理して呉れた。縦横に走るクリークに囲まれた部落は直線長距離運河の両側に並び農家は平和なたたずまいの中にあつたが、この水と森が敵の攻撃を守る自然の砦を生み、仏軍による攻撃は事実上不可能であった。またフランス植民地時代、フランス人によって開発された運河は直線六〇キロの水路となり、それが幾何学的な碁盤模様をなして展開している。同じ人工運河のオランダのポルダールの地割りととは違って、この直線は一大空間をなして延々果てなしとまで錯覚させた。

フランスは、この運河網によって米作中心の大々的なプランテーション農業を目論み、フランス植民者は大土地所有所となり、実際営農する者はベトナム人の小作人、日雇い労務者であった。しかも苛酷な小作料をベトナム人に突

きつけていた。祖国の土を耕す民族が他国資本の奴隷になり、民族の主体性は認められていないということなのだ。ベトナム人の家屋にはここでもモミ入れ、米櫃^{びつ}が備えてあった。間取りは台所と居間兼寢室だけで生活の貧しさを物語っているのが殆んどで、また雨季に浸水する低湿地に農家があった。全てが貧しさに責められているような風景を見せつけていた。反仏気運が生じないのが却って非人間的感覚と言えた。

運河の開削が進歩するとともに、官有地の払下げをうけられる人的コネクションと資本を有するヴェトナム人特権階級が、あらたに生じた可耕地をつぎつぎと奪いとっていった。一九三二年までに「コーチシナ」の米田面積の四五%が土地所有者数のわずか二・五%を占めるにすぎない六三〇〇人の地主によって占有されていた。……地主はその広大な田土を「借佃^{ダーテイエン}」といわれる小作人に貸付けた。一九三〇年代「コーチシナ」の全米田の六〇%が小作地からなっていた。借佃は収穫が終わると、一定の小作料を地主に支払う。これは全収穫量の四〇―七〇%にあたっていた。……多くの農民は種子・農具の代金、労務者の賃金を地主から借りたが、その場合には六カ月で五〇―一〇〇%の利子がついた。……苛酷な収奪によって地主に集められた粳は、革僑の仲買人をへてチョーロンの粳商人に集められ、精米業者から輸出商に委ねられて世界市場に運ばれた。植民地下サイゴンの繁栄はこうした借田層の犠牲のうえに成り立っていたのである。(前出――「東南アジア現代史Ⅲ」八三一―八六頁)

こうした事実が民族解放、独立は帝国主義反対、地主、封建主義反対の貫徹によらねば達成できない必然性を内包していたのである。日本敗戦後間もなくサイゴン仏人住宅地区の連続放火に犯人なし、はこの感情の一露呈であった。大尉がメコンデルタ地帯でベトミンに軍事教育を進めていたとき南軍司令官グエン・ビン(阮平)から協力を頼ま

れた。これによって大尉は南軍参謀格の身分となった。ただ司令官阮は、どことなく陰気な影を落している人物で、胸襟を打ち明け難い性格の人間で、下劣な権力主義者として映った。これは初対面時の直観であった。

同司令の幕僚の一人（アンナン人）は大尉に「北部から南下する人間が南部の物資をかつさらって行く」と吐き出すように口にした時もあったが、実体は南部も国内外の搾取に苦しんでいた。

参謀格になった大尉は一行とともに戦略について協議し合ったし、また引き続き幹部教育に力を注いだ。もう脱走後一年を超えていた。すっかり安南に溶け込み安南服と裸足の生活であったが、不思議にマリアにも懼^からず、与えられた農家で日を送った。スクールが過ぎた夕方は涼風が頬をなでる。子供が宝のようにして可愛がる水牛が群をなして草を食い、カマウと呼ばれるスゲ笠を冠った姿の農民が明るい表情で笑っている。一見平和なたたずまいの農村の表情ながら白人に対する怨みの強さ、深さは消すべくもなく、時に口にするのは「敗れば民族亡ぶ」の怨念言葉であり、戦う人間の姿があった。その日常言葉は韻を含んでいるので、美しい階調をひびかせた。特に青年行進曲とでも名付けた雄壮闊達な行進曲風のものがあり、またベトミンの軍歌は意味不十分だったが音調には聞き惚れるばかりで、青年よ進め、というスローガンにふさわしい抑揚があった。また大尉自身、ベトナム会話は自由にこなせるようになり、脱出時に携行した会話パンフレットは不用となっていた。

夜になっても灯はなかった。それが農村の日常であったが、それに馴れるに従って方向感覚は鋭くなった。ベトナム人の方向感覚の鋭敏さは、生活から生まれたものといえた。この感覚が軍事用伝達に不可欠なものであった。

敵の眼を避けるための移動、そのたび毎の友軍との連絡が要求される。伝達にはタイプで印されたメモであった。このタイプ文字はフランス人アレキサンドル・ロード神父が一九二五年安南漢字をローマ字表記の表音文字に改めたものである。綴り易く、タイプを打つに適したクオックグー（国語）がそれで、安南人にとってはいまではフランス

人による文字改革が紙に武器化されていた。自分で改めた文字が、自からを排撃する方便に転化したのは皮肉であった。このタイプメモを懐にした飛脚は一夜のうちに届け先に正確に渡した。それも大した苦痛にも見えなかった。この頻々な連絡情況は農村部落に点在しているベトナムが個別的な行動をとっているように見えながら、全体的作戦を有機的に動かしている原動力であった。

メコンデルタの農村部落でほぼ一年の生活はベトナムの風習に馴れる歲月であり、農民と同じ食事、貧しい食生活を異としなくなった。部落は五―一〇軒で一〇軒もあるのは少なかった。貧屋でハンモックに寝ることもあった。どこから送られてくるか見当もつかなかった新聞もスラスラ読めるようになった。社説も苦勞せず読めた。独立への願望を刻み込んだような社説であった。ベトナム語は上達したが、それでもベトナムは日本語の達者なベトナム（アンナン）人陳文買のほか阮太医の二人を一行の通訳として配してくれていた。この通訳が、あとで大尉の命を助けることになる。

その頃になってもベトナムの武器は貧弱で、脱走日本兵の持参したものが最良のものであった。この状態がフランス軍の大量兵力投入までの武装状況であり、またいわば一時的安定期の姿であった。しかも反仏闘争の根強さは貧困を物ともしないこと、最低の食糧自給で辛抱したことにあった。この辛抱という時間の長さは樂觀的というか、日本人と時間の概念を異にしているのではないか、という程の悠長さであった。だが、この悠長さの中には長年仏植民者による搾取への忍耐、それと底知れぬ抵抗力が横たわっていた。悠長と抵抗が相重なり宿っていた。

一九四四年当時、貧農、雇農は月二〇―三〇キロの米で辛抱しなければならなかった。また「公務員はフランス植民者に輕蔑され、同じ仕事を一緒にやっていたながら植民主義者の賃金は一般に彼らの五倍から一〇倍」（前掲「資料」二九九頁）という蔽とした差別が骨身に沁み込んだ人間が持つ身構えであったのだ。それが生活は夜食のかまどの火が消え

れば寝るほかない、といった太陽とともに生活しているため悠長に見えたにすぎなかったのだ。

現実を文字で抽象化し、それで解決するのではなく、怨念を一見のどかな樂觀的人生観の中に隠し、その実生活、人生の中に忍耐を包んでいた。反逆の回路とも見なされた。大尉も忍耐の哲学を必要としていた。

四

ラックザーにしばらく滞在したあと大尉一行ハウザン省ソクトラン（別名ソクチャン）に直行した。そこに南軍司令官のスタッフが会合していたからだ。折しもソクトランへの道々の水田には稲が伸び収穫の豊かさを告げている。その豊かな米も取り上げられ倉庫に入れば農民には縁遠くなる。つまり合鍵を持たぬ農民には倉庫内の米は別人のものだった。

大尉は石井少佐と相並んで司令官タイの前で熱弁を振って訴えた。「我々がベトミンに参加したのは独立運動に役立つのを目的としたもので、私心はない。ただ独立協力に身を挺しているのである」とベトナムの大地図を拡げて語った。この壁一面ほどのインドシナ地図は師団では割合に手に入る物品であった。司令官は、この弁舌に聞き惚れていた。二人の言動を見つめる眼には信頼感があった。それというのも、さきにハティエン周辺の仏軍を攻撃したときの一行の戦闘指導に感服していたからであった。

石井少佐と大尉の身の回りはアンナン人が世話してくれていた。このソクトランでも、軍事教育が進められた。ベトミンは八月革命後から幹部の不足を自覚していた。「新しい行政官、裁判官、軍人、技術幹部を養成するため政府が創設した学校は十分ではない」（前掲「資料」三四九頁）し、武器不足もはつきりしており、このため通常の戦闘形態をゲリラ戦と規定していた。そうして民兵についても「ナイフ、棒、槍、弓、石、煉瓦をもって戦闘に入った」（前

掲「資料」四八〇頁）ことと合わせ、大尉の戦略戦闘を主とする幹部教育に対し好意をもって受け入れていた。

こうして早くも昭和二十二年になっていた。ベトミンのゲリラ戦は民兵か正規軍の小規模なものでその場その場で調達できる兵器で武装している、と言ってよかった。日常生活の中にまで戦い―独立が滲み込んでいたのだ。そのころになると新聞はサイゴン発行のものが配られていた。ザラ紙使用の小型タブロイド版で社説は殆んど独立解放主張のものであった。

ソクトランで幹部教育を終えたあと、その北方約五〇キロの地点サデックに移動した。この移動はすべて越南軍司令との協議の上で決定した。サデックはメコン河に面したデルタ地帯にあった。同地帯では浮稲という特殊品種の米稲を植える浮稲地域で、日本人にとっては物珍らしい水田風景に映った。

稲を四月末から五月にかけて直播し^{じきまき}雨季を待つ。雨季に入りメコンデルタにあふれた水は稲田に冠水する。増水が早まるにつれて、その増量に比例して稲は上に伸びる。一日一二―一三センチの伸びを示す。増水速度が急でも稲先が水面下に沈むことはない。雨の止む間に農民は高床式の家からスオンと呼ばれる小舟を出し、その伸びた稲先を舟上から刈り取る。

下流の排水は不十分だから数カ月も冠水し、水深一メートルに達することになるが、浮稲は正確に米を実らせた。兼利大尉は幼時、田園地帯で育ったが、この稲の生育と刈り取りは生まれて始めて味う農村風景であった。

雨季雨量月一五〇〇ミリ以上、夏の季節風の影響による降雨に応じたメコンデルタの稲作は正しく水と川の論理の生活化といえた。水の論理で解釈しなければ理解できぬものであった。稲作、この雨季を待ち稲を生育させるという東洋の農民生活、それを主食とする東洋が西洋と違った生活上の線を画するのは、梅雨期を与えられるという自然の理にかなったものと言い得る。日本では予想もされぬ烈日下の稲作文化圏ということである。西洋では考え及ばぬ生

活の場であり、この水田模様に東洋民族の一特性を再認識せざるを得ない実感が全身に押し寄せた。

ところがフランス資本は、この稲作を利用しアンナンを米の国際商品として目論んだ。それがアンナン人の反感を招いたのは、搾取と白人の有色人種蔑視である差別、そこから出る打算があったからだ。大尉が常住したメコンデルタの人口密度は一キロ平方メートル当り一六五名に上る。この密度はデルタの豊穡さというか、巨大な空間が許しているものである。雨季に稲田が冠水すると水と陸の見境もつかない。デルタ一帯が湖となっている。それが時間が止ったと思われるように静まり返り、死生を天に委ねているような世界となる。雲低く垂れこめたこの涯しない水の空間。それは領土と人間を包み込んでいた。この空間も植民者に奪われていた。ゲリラにとっては、それは又とない有利な空間であり、この空間のある限りゲリラは時間をかせげた。時間と空間が保証されていた。この黙々としたデルタ景況は、いつしか一種の威圧を帯び人間の矮少を笑っているかのように映ってくる。自然を崇拜したくなるような、息詰まる思いさえ湧いた。

浮稲は、この条件を研究した農学者の創出した品種であった。長い稲茎は三メートルにも及ぶ。水深変化に伴う自由な伸縮性をもつ柔軟な作物。ここでは砂漠地帯などを始め麦だけを生産する土地を住居とする人間とは対照的な生活をする人間が形成されても可笑しくない、と大尉は考えた。この稲作さえ植民者の搾取の対象に含まれていた。フランスの民権思想などは本国人の白人だけのものにすぎなかったのだ。彼ら植民者は、自分の世界観が地球の裏側でも通用すると思いついていたのにすぎない。

この雨季の農村風景に似たものに日本では木曽、長良、揖斐三川下流一帯がある。だが日本のそれは「輪中」という人工的なものによる防衛策で、地域はメコンデルタに比べ、ものの数ではなかった。大規模なのはオランダのポルダーであろうがメコンデルタはそうした防水工事とは別なものであった。むしろ自然をそのままの姿にし、生産物を

適応させるという方法によっていた。

この冠水地帯でも幹部教育は続けられた。幹部充足、これがベトミンにとり焦眉の課題であった。「革命には鉄砲が必要だ」(毛沢東)ということ、それに先立っての幹部の育成、かくて日本軍人将校の活用という筋書きが読みとれる。だが、大尉は、そうしたことよりもベトナム自由と独立への無我的参加に意義を持っていたのである。政治と軍事両面の戦略、戦術、そして軍事面における戦略に、日本軍人、とくに将校の知識は必要であった。大尉はその時間と空間へ挺身していたのだった。経験と頑強な体力と精神力が必要だった。ベトミンにはつぎつぎと小範囲の移動があり場所が設定される。その度毎に飛脚が別の戦略単位部落に位置移動を通報する。水、天に連なる地の移動は実は放浪に近いものであったが、部落には抗戦委員会、政治委員会、さらに経済と武器などに関する組織体のほか生活全般に関する委員も組織されていた。それが情報を四方八方に放って驚異的なスピードで各枝隊、各中隊の移動伝達が行なわれた。政治委員は年長者が当たっていた。ここにもベトミンの年長者の経験尊重という政治の巧みさ、があった。大尉が移動するときには、この部落の委員の世話になることになる。どの部落でも人は勤勉であり質素である。消費は美德でなかった。村長はオン・リー(オンは敬称、リーは「里」の意)の名で呼ばれていた。

部落の抗戦委員は日本の自警団に似た組織と思えばよい。連絡委員は主婦、娘がその役割の殆んどを担当していた。大尉一行に対しては政治委員からの伝達もあったからか、「我々の独立協力者だ」と信を寄せていた。かといって生活は同じく質素なものであった。ここで特別扱いは無用だった。

地名もよく判らぬままの移動が繰り返された。この移動がゲリラの部落組織の強さの証明であった。大尉傘下のあるベトミンの枝隊には軍医が一名配属されていた。山岳民族のカモイ族、カメイ族の遊撃隊も編成されていた。

ある日のこと、遊撃戦が展開された。日本人の一人が負傷した。「ドンチ(同志)がやられた」と言い乍ら軍医が林

間の堀立小屋の野戦病院に運んだ。大腿部を骨折負傷していた。切断手術が行なわれた。傷は快方に向う筈であった。この時、フランス軍の攻撃を受け、病院が目標とされ、負傷日本兵は眉間を貫通され死亡した。氏家姓を名乗っていた若者だった。このあと直ぐ移動となる。退屈する時間は皆無だった。これがゲリラの生活だった。ゲリラだから兵服はない。ゲリラには移動が成立条件の一つである。ベトミンは、このゲリラ部落と自衛民兵、正規軍の三柱から成っていた。移動するからゲリラの実態は掴み難かった。村落共同体全体がゲリラ部落ともいい得たし、また平和な農村でもあった。この見透し難い人間の営みが大国の軍事力の前で戦いを続けられる一因ということ、水田、運河、湿地帯の多いメコンデルタでは占領するにしても点と線しか確保できないことを大尉は実感した。そうして生きるためには、何はさておいて飲食、ついで衣住であること、この感性は花鳥風月の観照では掴み難いもの、従って思弁のみの生き方とは無縁のものという考えがひらめいた。その自分が、たとえ仕事の分担が軍事的なものに限定されていたといえ、この一年有余のいま「ベトナム独立にある役割を果たしている」という感懐に浸ることが出来た。ただ、あくまで将来のベトミン幹部教育を主としたものであったとしても、いままで見得たものこそゲリラの本質と受け止められた。

サデックではホアハオ教（和光仏教）が浸透していた。同教は南ロンスエン近くのホアハオ村で一九三九年黄富楚（ヴェン・フー・ソー）によって創始された加持祈禱を主体とする大衆仏教であり、南西部メコンデルタ諸省に多くの信徒を集めていた。

もともとアンナン州はビルマの小乗仏教と違って北方から入った大乘仏教国であったが、南ベトナムは小乗仏教が多く、住民の中では十干十二支を慣用としていたところもあった。また山岳民族はそれぞれの民族宗教を持つ、という工合に生活と宗教は切り離せぬものにさえなっていた。大尉が直接見聞いた宗教がこのホアハオ（Hoa Hou）教で

あった。教祖は当時二十七、八歳、あとで大尉と友情を深めるのだが、その宗教の発生を通訳に聞くと、眼を輝かしながら教祖について、

「十九歳のとき、つまらぬことからフランス人に捕えられチョクアンの気狂病院に入れられ、あとでバクリュウに転送され監禁された。下獄してしばらくすると突然、天の声を聞いたのが、この宗教の始まりである」と説明した。さらに続けて答えた。それまでは周囲から平凡な少年と見做されていたのに、この天の声を聞いて以来日中というのにローソクの火を凝視し、口の中で余人には理解できぬ言葉をブツブツと口走るようになった。別に悪いことを言っているのではない。教祖は字を書くことを好み、字を書く者を愛した。こうして書き留められたのが身の丈ほどの厚さのホアハオ教典となった。これを漢詩に綴り韻をつけ口にした。ベトナム語独特の低音から始まり、ついで高揚し、また下降線音となり、また強い咽喉化を生ずる詩を口ずさむ。人の心を夢幻の彼方に運ぶような魅力を備えていた。教典の哲学的な価値観という概念解釈よりも教祖主張の現状打破姿勢が人を引きつけていた。

この天の声に呪術的条件を備えたカリスマ的な人物、非日常的なものとされる宗教的人間の姿があるが、フランス側が教祖を移動させる地で信者が集った。最高二五〇万人近い信徒を擁するまでに発展した。

教典には熱狂的なことがしるされていた。現世は乱れ果て戦火の絶え間もない。百鬼夜行の状態である。戦乱殺人の結果は、山は崩れ粉になり、それが流れて川は油の水となる、というものであった。これが人間を吸引するのは、この狂熱さであつたろう。もとより、この唱和される奇蹟は信ぜられてないのだが、「教祖に会い、その説を聞いている中に、いつしか、それを信じない訳には行かなくなる」と通訳は付け加えた。

教祖は超人間的な自然を呪術的に構築し、自からの言語能力で、この自然を言語化し、それを普遍化したのである。天の配剤（気象条件）で生産が左右され易い地域では、この自然観の呪術・宗教が人の意識を掴んでくるのは不

可避と言えた。その意識が信者を固定化する役割を果たしていた。とくに「現世が委（ウィー）鬼」と同じで、それが充ちあふれる世で、人は死滅する。川が油となる。それはアトミック・ボツム（原爆）のことだろう」と語る信者の姿には狂信だけでは済まされぬものがあつた。それに、それを信ずるベトナムの民衆の生活には圧制からの解放が焦眉の問題となっていたから、教祖の「この汚毒の世を変革する」という言動を人は吸い込まれた。信仰集団を政治、経済的な目標のものに意味転化させるものがあつた。さらに教祖は行く行くは軍事的指導性をも発揮するに至る。いわば民衆の生活があり、ついで、カリスマが解放イデオログとなり得る具体的な人間体験があつた。

經典を唱える信者の声を聞いているとき、兼利大尉は故郷・国東半島さきに多い石仏の里に想いを駆せた。眠るような石仏も、また無言の中に無償の行為の人間価値を示しているとも映じた。ただベトナムのこの地の宗教は、石仏にみる宗教と違った情念を孕ハラんでいた。背景に現状改革があることが、それであつた。これが、ベトナム人の結束を呼んだ。単なる土着宗教とは言えなかつた。南ベトナムの人口一七〇〇万人のうちの一五パーセントに当る教徒の勢力は無視できぬ政治的結集力に相違なかつた。

大体ベトナムでは第一次第二次両大戦間に新興宗教が興り栄え、ついで沈み消えたが、ホアハオ教は第二次大戦後、ベトナムの反植民地運動の中に勢力を伸長した。またフランスの影響からカトリック教徒も多かつた。しかし生活の圧迫から救いを求めるには現世利益宗教の性格を帯びる教団に魅力を感じず。嫌に悟り済ました宗教は具体的な救いを明示しない。それは圧制下の人間には逃避でしかなかった。そこで求められたのは神を作り出す超世界的な姿をもつ宗教とか、人を結びつけるのは宗教だから、それは社会に必要なだ、といった解釈とか、宗教に飼われて済ますとかいった思考からは外れていた。愛は万人を結びつける、などという教義は空想となってくる現在の実情があつた。その環境、存在が一定の解放目的に向う人間の努力・行動意識となつて行く。個人の意志は、こうした集団意志

の中にあった。現実感覚としての宗教が知らずして求められていた。そうしてホー・チ・ミンの超党派反仏闘争と結果的には結びつく必然性を内在させていたということである。ついで解放独立を目指す道と信徒との結合が生まれるかどうか、が問題であった。少なくとも宗教も解放への道をとる以上、政治との結びつかねば人を救うということは空念仏化するからであった。この点では、のちのちベトナム解放民族戦線指導者のうち僧侶テッチ・チェンハオ（中央委員）、グエン・バンゴイ（同・カオダイ教）、ホー・ヒューバー（ジョセフ・マリ神父・カトリック・ロンスワン副教会長・中央委員）、チッチ・ホウン・ツー（同、東部仏教協議会議長）、ホイン・タアン・ムウン（カオダイ教徒）といった宗教界のメンバーが控えていたのを見ると、ベトナムにおける宗教のあり方を窺う一端になり得るだろう（『世界—ヴェトナム戦争と日本の主張』昭和四〇年四月号参照）。

また仏教は二十二宗派もあり殆んどが中国伝来の禅宗、浄土宗で小乗仏教の流れを汲むものもあるが、その大部分がクメール等の少数民族のもので全仏教徒が四〇〇万人以上に上っていたのは無視できぬ現実であった。

サデック周辺を転々としていたときのことである。大尉の名はベトナム人の間に知れ渡っていた。皆は独眼の大尉をオン・モクマック（オンはミスター、モクマックは一つ目の意）と呼んだ。“独眼竜さん”という別名で、これこそ大尉を部落共同体の一員としていたことの証明であり、何かといえばオン・モクマックの名が交された。

軍事教育は、まずは戦前の日本における青年学校内の軍事教練程度からはじめた。もともとゲリラ戦訓練にあっては一同を練兵場に集めて集団訓練することは大した意味を持たない。大尉は情報収集も行なったが、これはビルマ時代の戦地体験が役に立った。こうしてサデック周辺の生活は大尉にとり入越以来の充実した毎日となった。部落のコーヒー店でよくコーヒーを飲んだ。コーヒー店といっても農家の家先でコーヒーを飲ませる程度のものである。ある日、コーヒーを飲んでいる時、行儀よく控え目な物腰で日本語で話しかけて来た青年がいた。

「貴方はカネトシさんという大尉を知りませんか。その人（注、兼利大尉のこと）もあなたのように片目の人ですが、私の親友のコイ（陳文買）が、その人と別れた後、片目の人を捜しています。私はカネトシさんを探して呉れと頼まれているのです」。話を聞けば何と探されているのは当然の自分であった。

陳文買はかつての通訳で一時、別行動をとっていたのだ。自分の通訳の名が出たのでその男を信用し自分を探している男に会った。その男はカオ・ヤン・ハン（高文買）で、高が行く行くは大尉に親切なもてなしをしてくれることになるのだが、カオ（高）は、

「自分の仕えている政府の特別委員（無任所大臣格、越南民主社会党々主、和好仏教^{ホアフオ}々主）が貴官と会いたいといっている」

と伝えた。

大尉は、その言を信じ会うことにした。いつしか自分の名は諸方に知られているのを知った。そうして、ある農家の軒下でその人物と秘かに会った。通訳がついていた。短い会見ながら、大尉は一見して、この人物の人柄にうたれた。こうした判断の勘というもの、それは生死の間の生活の間に身についていた。本能的な勘、これが戦陣生活で本能的とまでなっていた。その勘が働いた。「独立」「統一」について兩人の間に連帯意識が流れた。黄は高を大尉の通訳とした。ベトナム語に不自由はしなかったが、通訳は最後までついていた。これを機に黄教祖と大尉の交流が始まった。サデックの生活は、かくて入越以来の高まった充足感を伴うことになった。五月から続いた雨も止み、雨季の終りを告げていた。平和な毎日だった。とはいえこうした平和の中の軍事教育は閑なように見えても、これがあとあと一瞬の戦闘につながるものである。戦闘準備とは、こうしたものであり、これは大尉一行が自から身につけていた考え方であった。

農民は中国服に似た黒服を着用し、大切な水牛を可愛がり足踏み灌漑に精を出した。脱穀作業は一家一部落総出の仕事なのだ。共同体は生活上の必要体制であった。円錐形の笠を冠り、バナナの葉を器用に編み合わせた防雨ミノを身に巻いて裸足で農道を歩く姿には屈托がなかった。メコンの濁流に育った人間は、清流を良しとする日本人と違って物事をきれいな事のみで見らず、矛盾をはらむ社会の中に、身を任せ、それとともに生きているようであった。

そのころ大尉一行はホアハオ部落から西に回り、カンボジアとの国境地帯のチャドック、トリトン、ニャバーンを回った。トリトン付近では思いもよらず軟禁されていた市川洋次と名乗る日本人がベトミンに連行されて現われた。白哲で眉秀でた美青年で中国服を着ていた。妙な縁でこの日本人と数カ月の共同生活を送ることになり、帰国後も連絡し合う仲になるのだが、さらに一時、仕事のことから離れ離れになっていたかつて部下だった岡兵長（高知県出身）とも偶会した。

トリトン部落には、カンボジアから亡命していた前経済大臣バクチュンがいた。それでバクチュンと手を結び、国境地帯でカンボジアの完全独立を目指し武力闘争を開始していたカンボジア独立義勇軍「イサラック」(Khmer Issarak 自由カンボジア)と共同戦線を張ることにした。ところがイサラック内部が二系統に分裂し、一方はホー・チ・ミン系のソン・ゴック・ミン (Son Ngoc Minh) に指導され、他方はソン・ゴック・タン (Son Ngoc Thanh) の民族主義者を指導者とした反共、反政府のゲリラ隊になっていたことから、事が巧く運ばない。またバクチュンも大した実践力を持つ人物でないと判り、この政略企画は見送られた。何だかもどかしさが感じられた。

止むなく同行していたベトミンを率いホアハオ地区に引き返し、同地区駐留中の仏軍攻撃を企図したものの装備欠乏、火器皆無とあって勝算立たず、断念の止むなきに至った。

この巡行先のニャバーン、トリトンには標高二三三〇フィートを最高峰とする一連の山が聳え周辺はスイバイ（ス

イ山、バイ山）と称され土着仏教の聖地であった。またカンボジア側麓の部落には「ヒューギヤ」という儒教の一種を信ずる少数民族が住んでいた。ヒューギヤ（孝義）道を信奉しており「身体髮膚之を父母ニ^ウ亨ク敢テ毀傷セザルハ孝ノ初メナリ」の一句を型通り守り、毛髪、髭、爪も生まれて以来刈り取らぬという自然人とでも名付けられる山岳民族であった。そこで「自分は日本のニッケン（日蓮）だ」と自称する老婆僧に出会った。南無妙法蓮華經を最高至高と讃めた。この地に仏軍が討伐に来て発砲すると恐怖におのき「ナモアジダー、ファッ……」（南無阿弥陀仏ファッ）と引つ切りなしに唱えた。現世の火宅相を嘆いた人間、それは全く不意打ちのような人間出現であった。世にも不思議な風俗を見たが、これも戦いの合間の一実見であった。

「七つの山」の意味をもつ土着仏教、ヒューギヤ道ともに超人間的なものに対する信頼と怖れを内在しているのではないか、とも考えられる。仏軍討伐という偉力に対する恐怖も、その一現象とも思われた。ただ、カンボジアでは「伝えられた古代インド人の世界観、すなわち『須弥山思想』^{しゆみせん}がある。それによると世界の中心にはメー^ル山が聳え、その上方に神々の世界があった。メー^ル山の周囲は七重の山脈と七つの大海によって取巻かれていた。……神の世界と人間の世界との整合性を示し、『デーヴァラージャ』の秘儀によって神となった主が、王国の唯一の支配者であるという事実を印象づけるのに役立ったと考えられる」（前出「世界の歴史―インドシナ文明の世界―」一〇二頁）と言われていることは、カンボジア側からの浸透による宗教意識との混交と見做されないだろうか。また宗教意識の同一性は、その部落集団に主体性があることにつながる。

五

大尉一行はここに別れを告げロンスエンに移った。（注：このロンスエン付近は民族解放戦線が結成されたあとベ

トナムにおける解放区が七、八割にも及んでいた時も未解放地区となっていたデルタ地域（前掲「世界」一〇六頁参照）であった）。メコン河支流チエンサン川沿いの町で、そこから川中央の大きな島が望見されたが、ここには以前プノンペンから来た部隊の受け入れ訓練組織があった。一行はロンスエンから南西約八キロ地点にある戸数百戸ほどを数えるヌイサップで遊撃隊の軍事教育を担当した。開発された運河が走る向う側には饅頭型の小丘があり、学校と見られる大きな建物があった。驚ろいたことに、ベトミン二五〇名ほどの中に、目立つほどの脱走日本兵がいたことである。大尉は、この日本兵と面識はなく、それぞれが組を作ってベトナムに入り地区の委員の手引きで組織の中に入っていたのではないかと推察された。密な接触なく終ってしまった。もとより、その脱走者に近親性をもったものの、このときはどうすることも出来なかった。ベトミンはかつてのプノンペン攻撃、兵器奪取要員予定者であった。それに彼らは祖国の民族解放戦線の一員となるため駆けて来た志願者で組織統制もよく訓練され指揮官はグエン・ヤン・タイと名乗っていた。だが武器は貧弱、プノンペンで入手したという小銃は担いでいたが、手持ちの竹槍とか刀なども武器となっていた。この部落を教育することになり、通訳つきで基本訓練を施した。しかし平地における遮蔽物利用、敵からの離脱などを訓練教育する、日本軍での初年兵教育とは縁がなかった。地下壕は掘っていない時期だった。

ベトミンはこの訓練の合間には演劇の稽古をしていた。つまり宣伝隊アジプロ部門を兼ねていたわけである。稽古の総仕上げのあとは町の広場で一般農民にドラマを公演して拍手喝采をあびていた。その脚本の内容はフランスの圧制、ベトナム人の自覚、革命への参加という型通りのものであったが、この公演を見ているとき、いつも日本語の達者な青年が群衆に混って、大尉一行の言動を監視していた。これは当時の司令グエン・タイも承知の上と思えたが、後味は良くなかった。司令のこせついた底知れぬような陰険な人格が見えすいていた。

ヌイサップに一カ月ほど滞在したが、これは長期滞留の方であった。この滞在中、フランス軍がカントーから攻撃

をかけて来た。カントーは人口八万近く、メコンデルタ最大の都市でメコン支流バナック河に面しフランス軍駐屯地だった。カントーからヌイサップまでは約六〇キロで機動力を使ったフランス軍が一気に攻めかけた。遊撃隊は兼利大尉スタッフの指揮下で出動した。敵の銃弾が地を這ってなでた。この戦闘で日本兵二名（熊本県人と自称）が戦死した。そのとき多数のカオダイ教徒が集合し鄭重な葬儀をして弔ってくれた。大尉は部落の長に「今後も供養を続けて欲しい」と頭を垂れた。逃亡日本人の兵は各個にベトミンの枝隊に所属して各枝隊の指揮下で動いており、実態は掴み得なかったが、逃亡兵受け入れは農村の政治委員各組織が受け持っていた。そうして各枝隊に所属するので大尉には明細不詳のままであった。この戦死者のほか一人の日本兵が戦傷を受けた。

負傷したのを知るとベトミンは、その日本兵を素早く小舟に収容、息もつかせず水上に漕ぎ出し矢の様に後送した。この日本人に対するベトミンの行為は大尉の心を打った。また教団員が打って一丸となるカオダイ教団の力を知った。こうしてベトナムにおける宗派、宗団に深い関心を持つことになったが、宗教、宗団の内実を知ることがベトナムの人心を理解するためには不可欠の要素と思えた。こうした点については通訳の一人陳文買が折につけ肉付けしてくれた。

この戦闘のあと同行していた石井少佐は「北に行く」と告げ同行者一人とハノイに向った。それ以来、石井少佐の消息は絶えたが、あとで同少佐の戦死を知った。聞けばハノイに向ったあと、兵器を集めるためタイに方向を変えている。カンボジアを経てタイに行く途中死んだ、ということである。石井少佐がハノイまで北上したことは大尉の通訳阮大医と再会したとき「石井さんと北で会った」と大尉に告げたことで証明できる。このため石井少佐がベトミンを去った時刻を選びカントー付近で葬儀を取り行なった。ただ残念なことは石井少佐戦死を目撃した日本人がいなかったことだった。

石井少佐の葬儀を済ましたあと大尉一行三人はロンスエンの北方部落ミホイに居を移し暫時滞留した。一息入れる間もなくそれより北方一四〇キロの地点タイニン省タイニン（西寧）に急いだ。水田から遠く開豁地が望見された。竹林と灌木の多いタイニンの森の中の部落がある。常に移動する生活はビルマでの野戦生活そのままであった。しかし、この時期がベトナム生活中でも油の乗り切った活動期といえた。

タイニンはカオダイ教の本拠地だった。信徒一五〇万人、一九二六年サイゴンで創基され南タイニンに総本山を定め農民層に根強い地盤を持つに至り私兵を擁する迄になっていた。キリスト教、マホメット教、仏教、道教、儒教などの基本教義を総合したと主張する一種の総合宗教で、南ベトナムの新興宗教の一つだった。同教は日本の仏印進駐のとき日本軍に協力した宗団であるが、タイニンの町々には「銃ある者は銃を、剣ある者は剣を、剣を持たぬ者は鍬、鋤、棍棒を」というホー・チ・ミンのアピールに応じたベトナム人の姿が町に見られた。危険をさける隷属より将来の独立へ踏み出す困難な闘いを選んだ人間群像と見られた（タイニン省はあとで米軍枯葉作戦地域になった）。

タイニンでは大尉一行は師団単位の用兵を含む高等戦術の教育を行なった。少将、中將級の作戦要項が主で、一方下級将校には戦闘師団内での戦術教育を教えた。生徒の中にはベトミンの少将が顔を見せた。だが戦闘内容は、なおゲリラ戦を主としたものであった。こうして時は遠慮なく過ぎて脱出後約一年半以上の歳月が流れようとしていた。

このタイニンの森で岡兵長は某参謀の命を受けラックザーに赴いたが、途中、捕えられ消息不明となった。ここで大尉は本格的遊撃訓練の必要を痛感した。このため雨季も活動訓練可能な地を選定することとし、避暑地で有名なダラト市の周辺の山系に入り、そこで訓練する計画を樹てた。カムラン湾から西方約八〇キロにすぎない地点だが南北に五〇〇〇―七〇〇フィートの山が連なり、深い原生林が涯なく続き訓練の適地と判断した。

ところが雨量が例年になく激しく「雨季訓練可能」の見通しも崩れ、この遊撃隊訓練は挫折する。仕方なくベトミ

ン第一枝隊に入ることにした。同隊はサイゴン市から北に一日行程のツジョモク（現地発音はトゥザモットまたはワジョモック）東方の丘陵密林中に根拠地を置き遊撃訓練中で、そこで教育訓練に当たった。地形は丘陵を作っている。一時、同所からサイゴン方面に出動し遊撃戦を展開、これが前後三回続行、それが何れも成功した。それから大尉一行への信はさらに強まった。枝隊は一応兵舎住いをしており飛行場も設置しているように思えた。ベトミンの兵制がだんだん整い、かつ装備の近代化を図っていることを示していた。

また、この枝隊在留中も政治委員から眼を外らすことの出来ないことに気付いた。北ベトナムから高級政治委員が訪れ常駐していた。彼らは地図に委しく書き込んだ資料を持ち、世界情勢に通じていた。委員の通達が朝の集合時中心に下達されるのはここでも同様だった。

政治委員をベトミンは「コンサン」と呼んだ。政治委員の名称がコンであったためか、委員が共産主義の礼讃をするため、そう名付けたのか、その何れかだった。両者を兼ねて呼称していたのかも知れなかった。またベトミン内の日本人に対して「新越」(Thank Viet) と呼びならわした。ベトナム人ではないが、ベトナム人になり切った日本人、ということになる。これと別に、この呼び名の内容がいわゆる義勇兵の概念を伝えるものでない、ということだろう。ベトナムは解放戦争に当って自国民族だけで戦い、「北ベトナムは最後まで外国の義勇兵を一人たりとも受け入れなかった」(丸山「ベトナム解放」一八五頁。朝日選書) とされているが、この「新越」の名は、一体どんな意味を持つかを噛みしめさせる言葉である。

同枝隊滞在中に、同じ目的で入越していた中島大尉（福岡県出身）が横死した。それは「越奸」（フランス協力者）の疑問を持たれたための横死であった。中島大尉はベトナム入りしたあと菊村と自称していた人で兼利一行との係わりは殆んどなかった。このように一行とは別に入越した日本軍人が諸々に散在していた。各人がベトナム独立解放を

志し身を抛っていた。単なる感傷でなく、戦後のインドシナにおける日本軍人で植民地解放を目指した人間の一つの途を、この行動に賭していたのであった。純粹さが死神を呼んだとも言えよう。

だが、この「横死」を見せつけられたとき、一抹の不安が一行の心を包んだ。ベトナムと一身体になり得るのか、という基本的な人間課題を迫られたのであった。この枝隊では大尉の遊撃戦指導を高く評価し「このまま、ここに居据って欲しい」と要請した。だが中島大尉に見た横死の姿。いわば無益に消えた日本人を直視すると、それを素直な気で受けるにはためらわざるを得なかった。

歴史の進展は一個人の幸不幸、運不運を度外視するものだ、とは納得できても、現実の生なまの人間として、この横死は余りにも強烈すぎた。簡単に一人の人間が消される、ということは一体どうしたのだろうか。日本人として、どう理解したらよいか、という念がつきまとうようになった。大尉のベトナム生活は、ベトナムが民族解放戦に至るまでの比較的、静かな時期であった。だが、このときには痛切な予感、といったものが身体中を走った。それは「無益な死」が自分も襲うのではないか、という危惧の念であった。

六

忌わしい情報が届いたのは、その頃である。日本軍人西川参謀が殺された、という悲報がそれであった。西川参謀は陸軍少佐と自称し南司令の許で働らいていた人物と聞かされていた。ただ西川参謀と名乗っていたが、実は憲兵少尉ということだった。善意に解釈すれば、憲兵は一般的に自分の階級より一職務上官も取調べる権利が与えられていたのも手伝って、自から少佐と名乗っていたかも知れない。また昇進が他兵科に比べ遅い憲兵は尉官階級でも佐官を名乗っても年齢的には似合うことになるからである。

そうした点を考慮に入れても、何だか胸につかえるものがあつた。そうして更に石井少佐も自然死でなく暗殺されたのではないか、と推理した。これまで解放の友として、重宝に遇されている人間が、何故に殺されねばならないのか。ただ、当人の死亡を目撃した日本人がいない。それとなくさぐりを入れると「ちょっと用があるので同行して欲しい」と言われ、森の中に分け入る。そこで息の根を止められる、というのである。ゲリラ活動だから森の中に入るのに疑問を懐くことはない。それで同行する。そこで、有無を言わず殺される、という手法であつた。

横死を疑いたくない。だが疑う余地のない日本軍人暗殺の現出である。それも将校に限られている。疑い出せば際限がない。善悪で割り切れぬものがあつた。悪こそ人間の本性で、善より悪の中に歴史を動かす原動力が潜むのだから、などと思案をめぐらせた。

一夜、まんじりともせず推察を重ねた。将校は内情に委しいから、というのも一因ではないか、また疑問なのは石井少佐の場合も兵器をめぐる問題を知りすぎていたから、邪魔者になつたのではないか、それが死を呼んだのではないか、ということであつた。疑問は次々と湧いた。疑心暗鬼に陥つた。事実とすれば日本軍で入越した者のうち将校には同じ運命が待っている、ということになる。大尉は足元の大地が崩れ落ちるような気につき落された。

だが結論を急ぐのは、まだ早すぎる。さらに真相を知ること努めた。西川参謀は、さきに南方司令の作戦参謀をしていたときカオダイ地区に軍官学校を創設するときの協力を阮平司令から頼まれている。そしてそのことを本人が聞いた翌々日午後に院司令自からの指令で殺されている。それを知らせてくれたのは、事件後、何日か経ってから訪れた西川参謀の当番をしていたアンナンの若い兵士であつた。

その時の状況は大尉の脳に今なお鮮明である。この兵士が恐怖に顔をひきつらせて疲れ果てた表情で駆けつけ息を切らせて、早口で西川死亡を告げたあと、死亡は計画的なものだと述べ、

「その事件は移動途中に泊った民家で夜中に起きた。西川が熟睡中、突然自動小銃を持った者に急襲され即死した」と語った。食事中の大尉は思わず右手から箸を落した。

当番兵は寝台の下に隠れたあと必死に逃げた、と言う。そう報せている間にも、罅りを見回し、生色はなかった。襲撃された個所はベトミン第六枝隊の勢力圏内であったことから、下手人は第六枝隊所属兵だろうと推定された。これに対し大尉一行の通訳陳と高は「西川参謀はカオダイ教徒に殺られたのだろう」と違った意見だったが、西川参謀の伝令兵もいずれ憲兵に連行されるのではないかと憫んだ。当番兵がカオダイ教だからであった。そうすればカオダイ教対ゲリラ部隊の暗闘の色彩が強くなる。

カオダイ教は、かつて日本軍の仏印進駐時、日本に協力したこと、時の権力側につくこと、これは真の解放につながらない、という理由から両者の間に軋轢があつたのかも知れない。だが、これはカオダイ教に限つたものではない。「日本ファシストは：一九四三年九月各党派に命令を下した。：フッククオック（復国）、ダイビエット（大越）、フックビエット（復越）、クオックサー（国社）、カオダイ（高台）、ファットタイ（仏教―すなわちホアハオ教）などが、サイゴンで大会をひらき、統合して『ベトナム復国同盟会』を共通の名称とする親日団体をつくり『臨時政府』の樹立を準備するよう決定すべし（前記「資料」一二七五頁）」に見るように教団と部隊の問題が介在していると思えた。何れにしても日本軍人（将校）が殺された、という事実であつた。

一行の頭を横切つたもの、それは「所詮、日本軍人はとくに将校は利用されるだけだろう」ということだった。民族解放は自己民族のそれであり、他民族が容喙するものではない、ということ、民族は抽象的なものでなく、生きた民族相互が最後に自己主張することである、という想念が湧いて来た。或いは日本軍将校は、よし下級将校であっても所詮ファシスト視され協力の役割りを果たしたあとは無用者になる他ないのだろうか。無用になった者は消されるの

だ。人民戦争においては外国の義勇兵は一人も受け入れる余地はないのだろう。とすれば半ば義勇軍的色彩を持った日本人の協力は否定される。排除の理論が生きてくる理由がここにあるのだった。

こう考えたとき大尉は身の処し方に苦しんだ。演劇公演中の被監視など多年の戦闘体験による一つの勘で当たっていた。すーっと冷たく胸に迫る一事実。それは暗殺という全く予想外の情況切迫である。電光の如く身体を走る危機感であった。と同時に独立へ参加し東奔西走した結果が、こんなものかと怒髪は天を突いた。人民戦争の核心である人民になり切って走った身が哀れに思えた。だが一刻を急ぐ時は迫りつつあった。ガラガラした、掴みどころのないものが胸の中にわだかまり、それが渦巻き脳髓をつき上げた。

このツジョモク脱出が焦眉の急なのだ。それも極秘のうちに逃げねばならない。そのあと再びメコンデルタに向け南下したらよいだろう。それ以外にない。しかしそのためには通過証となる地区司令の信認状が必要である。そこで困難を承知の上でカオダイ教大本山タイニンに足を向けた。同所は横死した西川参謀が所属していた第六枝隊の勢力圏である。そこで南軍司令の指導者阮平^{グエンビン}に信認状下付を要請する他ない。

タイニン近くまで歩いた時、顔見知りになっていた老夫婦に出会った。大尉の顔を見ると夫婦は「第七、第八枝隊は解散した」と告げた。ここでも枝隊といっても連絡兵、炊事兵を含め一コ枝隊（大隊）三〇〇名程度ながら、かつて一行が住居を得ていた隊であったし、まずはその隊に合流しようとして急行している身であった。今や身を寄せるところは無い始末となった。しかしメコンデルタに出る以外に処身方法はない。

急いで高台地区で面識を得ていたファン・フー・ドックの率いる第六枝隊を訪れ、そこで一、二日の休養を頼んだ。ところが、当時は好意を寄せていた枝隊の空気が変わっている。以前の親しげな対人関係は消え妙に断絶的でよそよそしかった。大尉は自分の判断は正しいことを、この表情からも認めたが、引返せぬ身である。司令阮に会うため

の場所とされた、サイゴン西南エンザン省のドン川の中流にある一部落に歩を進めた。阮と会った。対面してみると初対面の時と同じく陰湿な臭いをただよわせていた。腹に剣をひそませている人物、それが阮なのである。

阮は黒味がかった粗末な平服に身を包み黒眼鏡を掛けていた。小男ながら精悍、抜け目のない警戒的な眼と低音の持ち主で、それだけでも油断ならぬ人柄を思わせた。司令は一別後の大尉のことは聞いていた。また入越当初、ハテイエン付近で大尉がベトナムに武器弾薬を提供したことも確認していたこともあって信認状を手渡してくれた。そのあと大尉に協力を乞うた。それは予想外のことだった。彼はつけ足すようにして、

「タイニン付近の六村に軍官学校を創るので、その校長に就任してくれぬか」と持ちかけた。大尉は「顔見知りの者もいるので困る」と難色を示した。すると「黒眼鏡をかければ分りはしない」と濁った眼を細め笑った。彼が笑顔を見せたのは、この時だけであった。恐怖の指導者とは、こんなタイプだろうと一しお感じられた。「とにかく疲れ顔ているだろう」と一軒の家を当てがってくれた上、通訳陳をつけてくれた。

ここで阮は大尉に作戦計画を持ち込んだりしたもの地獄一つとて与えない。それだけでも怪しい。大尉は時折、時間つぶしに部落のコーヒー店に行ったりした。また在越日本人の実態調査をしようとも考え、同時に啓蒙新聞として「新越新聞」発刊の提案も出した。カオダイ地区に軍官学校を設置する話は部落の中で知っている者もいたが、いまは設立よりも彼の魔手から去ることだけが最大課題であった。入越後最大の身の危機が迫っていた。

軍官学校設立の話聞いて三日目、大尉はただ一人普段と同じようにコーヒー店に立ち寄った。周囲を見回した。普段と変りがない。「よし今が機だ」と同行者に急報し特別委員事務所まで小走りした。この時の案内人は大尉の当番をしてくれたアンナン人であった。二、三キロ走ってウンビルという部落に辿りつき、そこでホアハオ教主黃富楚の許にかけつけた。これで阮の許から去り得た。あとで阮はベトナム解放後ボート・ピープルの形で流出しシンガポ

ールを経てパリに亡命している。亡命の理由を委しく聞くことはできないが、往事の態度から推し図れば阮は独立解放への信念の持主でなく権力主義者であったと推量された（ポートピアール《難民》流出は一九七九年一―六月に一五万人に達し、わけでも五、六月で一〇万人を数えている）。

黄富楚は温かく迎え入れてくれた。と同時に阮の追及を懸念した。教祖は「小舟を用意せよ」と、教徒に指図した。日が暮れるのを待って大尉は小舟に乗った。船は一晚中暗黒の中のクリークを走った。行きついた所は十智（モイチ *Moi tri*）という男のところだった。黄教祖からのモイチあての信認状を手渡した。このモイチは何と海賊の親玉であった。高床式の民家風事務所を構え大勢の若者が忙り気に立ち回っている。これだけの人間をまるで自分の手足のように使いこなしているモイチはまだ三十歳前で、サイゴン南方ショロン市の海岸水路全部を制していた海賊集団（ビンシュエン）の頭目で、また反仏抵抗機関を牛耳っていた。小男ながら眼の奥は光り人を射た。大尉と引見している間にも手下がひっきりなしに指令を受けに来る。その輩下に短かい言葉で指図する。会談中、笑うと金歯が光り、その笑顔には人を引きずり込む愛嬌があった。相当の人物と直観された。モイチは「貴公らの身柄は責任をもって引き受ける。大舟に乗った気で落ちついて貰いたい」と約した。

それから直ぐに小舟を用意しデルタ地帯の真只中の一軒屋に大尉一行をかくまった。小舟は農民の足であり、大尉一行にも不可欠な生活必需品であった。夜になれば満天の星が明滅し南十字星が天空に十字を切り水田の上をホタルが飛び交う。小屋住いして間もなく仏軍によるデルタ地帯討伐が二、三回繰り返されたが、その都度、住民の通報で安全地帯に隠れた。住民は大尉一行を信じ切っていたのである。この退避中、二、三人の日本人に逢った。おそらく逃亡日本兵か、民間人がそのまま居ついていたのか知れなかったが、ここで昭和二十三年の正月を迎えた。逃亡三回目元旦だった。元旦の夜、小屋からサイゴン、ショロン市の夜の灯が都塵を照らして上空に光っていた。だから居

住地はサイゴン（ホー・チミン市）東南二〇―三〇キロと計測し得た。

モイチは大尉に向って「日本は反共国家様の中に再編成されるだろう」と、自分の予想を打ち明けていた。だからといって反共主義者でもなかった。ただ反帝国主義者であることは確かであった。だからモイチは反仏反帝国主義に同調しており大尉を客分として遇した。

こうして何となく日を過している中に黄教祖が「サイゴンでの会議の帰りだ」といって大尉を訪ねた。彼は「正月用に使ってくれ」と言って山下中尉、庄野少尉と合わせ三人分の絹のベトナム衣を新調してくれ、また缶詰をお土産に置いてくれた。窮迫に身を置く三人の眼から涙がとめどなく流れた。ついで教祖は三人を前に熱意あふれる言葉で語りかけた。

「準備が整えば二コ師団を擁して南下する計画である。それで貴官に総司令部を創設して欲しい」との依頼である。さらに「我々は貴官を利用するという気は毛頭ない。ただ我々はいま困難な状況下にいる。貴官らも同じと思う。こうした者同志が助け合うのです。やがてベトナムが独立した暁には日本とベトナムは親善提携しなければならぬ運命にあります。互いに力を尽しましょう」と信念を吐露した。

折から月が水田の西に昇った。広がる水田。それはチベットに源を発し水流四二〇〇キロ、ベトナム南部で多くの支流を作り、デルタを形成した瀾滄江^{メコン}のもたらして呉れる豊沃そのものであり、デルタの農民の生活の内容そのものだった。その月に向って教祖は両手を大きく広げ挙げて背伸びした。月に映ったその秀麗な眉目、真直ぐな鼻筋、紅色の唇は美しく人の眼を奪うに十分であった。雲飛揚す、の気概があった。大尉は身の引き締るのを押え切れなかった。人情論を超えたものだった。勇心勃勃たるものが胸底から湧き上り高揚した。ついで大尉は自分の意見を開陳した。それはホアハオ教、カオダイ教、越南民主党などを打って一丸とした団結の必要性、反仏反植民地闘争への展開

であった。この時、宗教団体は反仏反帝ではあったが、なお共産党とは一線を画していることを知った。

ともあれ大尉の意見に同意した黄は軍事総司令の準備を念を押し押し依托した。こうして黄は去って行った。大尉は司令部の設置場所をサイゴン南方約六〇キロのミートに内定した。同地は米、ココヤシ、果実、サトウキビの取り引きと加工の中心地、サイゴンとメコンデルタを結ぶ市場であったし、また仏軍の海軍基地もあった。この設置についての申し合わせと実施についての信認状が大尉には手渡されていた。

大尉は黄がつけてくれた通訳高を伴い、再びタンモイの大湿地を通りメコンデルタの中心地に向った。戦闘指導における際の实地検証のためだった。運河を小舟で渡りクリークの細い渡し木を踏み渡り、裸足で歩き泥水をかき分け小川を徒渉し湿草に足をとられて進んだ。疲労は加ったが、日本の収容所を脱出した時に考えていた目的がやっと叶えられるということと、懐いている雄図が疲労を吹き飛ばした。

計画の諸細部について黄教祖とは、ある一軒屋で会うことになっていたので、その約束地点小屋に辿りつき、与えられた茅屋で二週間以上も徹夜に近い作業を続け黄を待った。その時の生活はまるで「またぎ」（狩人）と同じだったが精神的な高まりがあった。これまでの、ややともすれば崩れそうになった勇氣は甦って熱気となった。暮しは低かったが志は高まった。師団編成作業を練り上げている中に一カ月近くが経った。

ところが、ここで又もや夢想だもしない暗いニュースが届いた。

それは黄教祖暗殺の伝達であった。電話も電信も、ラジオもないのにニュースは直ちにもたらされた。その伝達速度はゲリラ組織の完全さを裏書きしていた。肝胆相照らした黄の暗殺に頭の中は混乱してしまった。空虚になった。だが一体誰の手によって殺されたのだろうか。単なる殺人事件とは思えない。新興宗教に対する弾圧の現われでもない。ただ黄が二五〇万人の信徒を擁するまでとなった一大勢力の具体的人物だったこと、その信徒は私兵化すること

も可能だったこと、黄は「宗教と共産主義は油と水だ」と考えていたこと、それがベトナムの改革には限界点を示していたこと、だが有能で影響力甚大であったことなど、と無関係とは思えなかった。しかし一愛国者の死は一個人の死では終わらない。反植民地闘争に向けられた刃ともなる。

「水と油」の関係にあると述べていた黄は民族解放の主導権を握るベトミンの領首にとっては、何れは敵対する人物と見做されていたのではないかと解された。委しく調べると黄はサイゴンでベトミンとの政治会議に出席し、その時、欺かれて兇弾の的となっている。齢三十前に暗殺されていたのだ。富についてはかつてホー・チ・ミンにより無任所大臣に任命された経歴を持つと聞かされていたが、それとて消される。民族解放は宗団を含めた超党派組織の筈だった。それが暗殺者の手にかかる、ということはスローガンに掲げられた綱領はフィクション化する他ない。このようなマイナス要素になることを、実践的人物が行なうとは考えられない。つまるところは、内部の勢力争い、独立に向う各勢力のヘゲモニー争いが生んだ悲劇といわざるを得なかった。現実の力が、それも目に見えぬ現実がスローガンを嘲笑してしまった（一九五五年四月カオダイ、ホアハオ両教徒がサイゴンを完全包囲したことはこの宗団の軍事的強さ、民衆の同調、人心の方向を物語っている）。

大尉の背筋を冷たいものが走った。ベトミンにとって日本人将兵は最終的には相容れぬ存在であった。「寝首をかく」という日本の戦国時代にも似た状況ではないかと、と身震いした。この黄の逝去のあと西川参謀の通訳は別勢力に逃げ込んでいた。カオダイ教徒だった、という男である。

「事態は甘くない」という思いが改めて心につきささった。解放への協力という自分の無償の行為は、いずれ理解して貰える、と信じていたが、事ここに至っては、それにも疑いを持つ他なくなった。

民族といい国家という。だが、それがスローガンになり、ついで抽象から実勢力の具体性の中に入ってくると予想

外の事態をもたらすのではないか、という事に力点を置かざるを得なくなった。デモ的な力に転化するのには正に、この言葉と概念を矮小化してくることにあるのではないか。アジアの目覚めを、ナショナルインタレストにしぼり国家を狂的にまで伸ばした日本が、それによって敗北したのは、つい二年前のことであつたのを痛感した。科学的世界観を喪失した狂的国家ニッポンの過去を思った。ベトナムは、この日本の失敗を繰り返すとは思えなかつたし、信じなかつた。だが、内部におけるこの人間関係は、卑劣さはどうか。それは目的達成のため不可避のことなのか。理由はどうかあれ、刻々と去る日迫るをと決意した。断腸の思いが身を貫いた。

そうした折も折、かつて通訳として身辺にあつてくれた安南人阮大医が大尉を訪れた。彼はハイスクール卒で、いわばエリートに属してもよい人物だった。阮大医は大尉に会うなり告げた。「ベトミン幹部が『片目』を探している、ということハイスクール時代の親友が教えてくれた。友人は、このことを黄教祖の書記から聞いている」。こう伝えたあと「だから大尉の身を案じて急報した」と念を押すように付け加えた。

この「探している」ということは、身柄を捕えて消すことと同義ではないか、と考えた。いまや大尉自身が寝首にかかるような事態が訪れていたのだ。雄図は露と化し、入越目的は幻想化した。絶望の淵に立たされた。黄との親交が、その狙われる一原因となつてゐるかも知れないが、大尉は愕然となつた。そして、この通訳に感謝した。

なお同通訳はあとでサイゴン松下電器に入社、同志とともに一九七一年石井少佐の顕彰碑を携えて来日した。その時の話では、当時、大尉の教育を受けたベトナム人は何れも佐官級に昇進し、建国のため活躍したが、戦闘に倒れた者多く、生き残った者は僅か八名となつてゐた。阮大医は有能を見込まれ南部軍の少将に昇進、一九五四年七月のジュネーブ会議に代表の一人として参加、初代南軍司令官となつた。

またこの来日を利用し、大阪府千里丘陵万博会場付近のパゴダで石井少佐の慰霊祭を取り行なつた。石井少佐も

矢張り最後はベトナム独立のため戦死したとされていた。これを忘れないところにベトナム人の思義強さの一端が見られる。

「逃げねばならない」「甘い口に乗ってはならない」――結論は電光のように閃いた。だが、一体、この大湿地デルタからどうして逃げるのか、が問題であった。しかも盟主を失ったホアハオ教団の力には頼れない。教祖は宗教家としても抜きん出ていたが、宗徒を革命的集団に育てる力も具有していた人物だった。その教祖を欠いている教団に行くのもはばかられた。また「片目を探している」というのは大尉が同行中のリーダーと目され狙いをつけられているからだろうし、教団に行くにしても先回りされる、という危険性がある。しかし、ここまで来たのも一行三人という複数だから狙う時と場が少なかったとも言えた。島田姓を名乗る林軍曹は「アンナン人になり切ってミートで暮したら」とも言っていて呉れた。といっても狙われているのは日本軍将校で下士官、兵は殺さない。ということは、よし殺さないにしても、解放に同調した旧日本軍は利用するのが目的だった、ことが理解された。

武器の必要性と、作戦計画への参与が、この脱走兵受け入れの基本であった、ということにもなるのだ。いうならば「狡兎死して走狗煮られ、蜚鳥尽きて良弓藏さる」の譬の通り目的達成後に謀臣は不要ということになる。ともあれ事態は脱出時と丸反対の方向に展開しようとしていた。それとて対日感情の変化とも考えられない。ただ南部に比べ北ベトナムでは日本の侵略が歴史的事実として取り上げられ批判されていることを無視できず、かつこの事実認識が歲月とともにベトナム人の意識に深くなり、日本人観が変化していたのかも知れない。

万策つきた大尉は黄富楚教祖の出身村近くのベプスーン部落に辿りついた。そこで一時的にせよ在来通りベトミン教育に当って難を回避しようと試みた。そうして幹部教育に当たったが、心が冷え沈むのをどうしようもなかった。も

う昭和二十三年も二月になっていた。単に挫折などという言葉で表現できぬ、裏切られたような苦痛が全身に浸み込んだ。郷里が無性に連想された。農作業で生活している両親は息子の帰りを待っているに違いない。国東に散在する石仏、水害防止を祈っている石の大磨崖仏が自分の行為を坐ったまま、見守っているような幻想にさえとりつかれうになった。それが数千里も離れた故郷が自分を呼び寄せている声になって耳朶を打った。いまさら、ここで暗殺されるとは無益の死なのだ。ある程度の反植民地闘争に参加した、という自からの慰めが残るのみである。

そのころからサイゴンの残留軍司令部にあった斉藤弘夫元中佐参謀から二、三回にわたって秘密連絡があった。同中佐は遅れて帰国しているが、敗戦当初は、独りインドシナに残り東亜の情報網を作りあげようと企図していた。またベトナム投入時に大尉が同中佐に自分の計画を打ち明けていた事もあるが転々としながらも中佐との連絡は欠かしていなかった。そして今、同中佐に身の処し方を相談することにした。それは『投越の目的は果たせず、またこれ以上の成果は期待されず、むしろ失敗だった』に尽きた。

身をメコンデルタに曝し終っても悔なし、の決意で脱出したのが、いままた思いもよらず斉藤中佐への連絡となっていたのだ。折返し中佐から秘密ルートを通じて返信が届いた。「サイゴンに戻り来り、小官の許でアジアのための戦略（具体的には情報網の設置）に協力して欲しい」というのが、密書の中味であった。

この密書には斉藤中佐の大尉に対する心根も宿っていたが、同意できぬものがあつた。もし、この構想に荷担するなら、それは結果的に安南人を売ることになる。という点に尽きた。自分を殺そうと狙っている者がいたとしてもそれはベトナムの少数者にすぎないだろう。多数のベトナム人は自分に親切であつた。それを裏切ることになる。それどころか、脱走時の自己目的と余りにもかけ離れた企図であり、そこに身を投ずるのは、喜劇役者になる。ついで悲劇を演ずるに至ることであり、それは良心が許さないのだ。心情論を超えねばならぬ時であつた。

どれだけ多くのベトナム人が自分につき伴い、仕えてくれたことだろう。危急を救ってくれた通訳もベトナム人ではなかったか。二年数カ月に亘り自分を信頼したのは、このベトナム人であった。こうしたことを想起すれば、この中佐の申し入れを呑むことは、自分の節操が許さない。それに、この澎湃として渦巻いている民族独立解放運動の中で、このアジア情報網創設というのは、所詮は日本帝国主義の写し絵と受けとられるにすぎないし、政治的に自覚したベトナム人は、そうしたことを直ちに見破るに違いない、と推論した。

ベトナムの民族革命は独立と社会体制変革の同時進行なのだった。いま再び日本帝国主義に立ち戻るなら、その時はベトナム人の嘲笑が待っているに違いない。

だが、この現場からは去らねばならない。このことを斉藤中佐に告げた。昭和二十三年春二月前ロンスエンに斉藤中佐が面接に訪れた。同行していたのはロンスエン駐留フランス軍司令官の中佐であった。この時、大尉は帰国を決めた。そうして大尉一行三名がサイゴンの日本軍司令部に帰投したのは、それから一カ月後であった。

サイゴンに行く前に脱走入越日本兵には、通訳を通じ秘かに帰国意図を抱くに至った経過を話した上で同行を求めたかった。同じ日本人、また戦争体験者同人の感情からだった。しかし各枝隊各地区にバラバラになっていた脱走者に意を告げることは不可能に近い。兵士の中で嫌になった者は自から見切りをつけて日本軍の収容所に帰る者もいた。しかし残留して戦死する者もあるに違いない。よし壮健に暮し得ても、今後どんな運命が待っているのだろう。途中ベトミンから裸になり脱して来ていた兵の一人、名古屋市中京商業(旧制)卒のある上等兵は「ベトミンは兵器を欲しがっていた丈けだ」と述懐した。戦後三十数年のいま思い返し、かつはベトナムの平均寿命が日本よりも短かいのを勘案すれば、投越者の殆んどは鬼籍に入っているだろう。

サイゴンに戻って一カ月、大尉一行三名はサイゴン岸壁から日本向けの船に乗った。英国の軍艦だった。艦上にイ

ンパール作戦の責任者、牟田口廉也氏の姿を見た。シンガポールでの戦犯裁判における証言者として出廷した帰りの事で、もうすっかり一老人になり切って大尉に白紙タバコをすすめた。

故国に向って波を立てて進む艦上から、ベトナムの国土を眺めて万感が胸に去来した。

黄富楚の横死という痛恨事、モイチという海賊の親分の人柄、大湿地帯の逃走、密林地帯の生活、雅びやかな安南の言語、そうしたこともが相前後して乱れ合って襲い、また去って、再び押し寄せた。

駆け巡った範囲は東西二八〇キロ、南北一六〇キロ、さらにサイゴン（ホ・チミン市）北方二四〇キロ、モイ高原のダラトへの北上がある。消費と退廃の都市を彼方に見たベトナムとの生活、クリークと部落と密林を縦横に走り、親しく農民と交ったベトナムの生活があった。

左岸に見る椰子の木の濃緑葉、美しい海岸線の砂に押せては返す白波、メコンデルタ六八〇万ヘクタールに住む六〇〇万人のベトナム人の姿も、去り行く身から離れて行く。この自然と平和を愛したベトナム人の多くが、一九六五年から七五年四月までの大規模な解放戦で斃れるだろうとは、この時予想もされなかった。

独立か、然らずんば敗北か、のスローガンの下に戦っているベトナムの姿は、民族の独立権主張について、全世界に諸^{イニテリス}という確答を迫っているのではないか、その声は人間の声ではなかったか、を我と我が肉体で感じた日々であり、それは生涯忘れられない軌跡になるだろうと予感された。それ以外一切は過去に流れて了ったような氣に陥っていた。白駒の隙を過ぎるような人生に思いを致した。

同時に戦場に散った日本兵士の姿がつぎつぎと浮かび上った。「散華」などという、きれい事で済まされぬ人間の死を思った。この戦死者の心に思いを駆せ、ベトナム人とベトナム参加日本兵士の死を重ね合わせ、それが文字に現わし得ない重みとなって胸底に沈んだ。

こうした数多くの無名戦死の犠牲の上に、日本は平和を得たのではないか、無血で天上から舞い降りるように平和が訪れたのではないのだ、と反芻^すした。すぐにも足を印するだろう平和日本。その平和を、あだやおろそかに取り扱ってはならない、死者の魂を鎮めるためにも平和を大事にしなければならぬ、それが今後の祖国の命題とならねばならぬのだ、という念がわれとわが身を突き刺した。

すさまじい程の過去から受け継ぐ平和状況を思うにつけ、歴史は中途半端なものを嘲う生き物のように思えた。人間は自分勝手な映像で歴史を作れないということについては十分に認識していたが、それを体験した。兵隊の死、その死を美化するような死の思想を拒みたいと誓った。とくに偶然―運命についていまなお頭に焦げついている瞬間を省みた。省みるというより沸騰した。それは生死を共にした当番兵の死であった。南部印緬（インド・ビルマ）国境アキャブ作戦で敵の鉄条網を軍刀で叩き切って進もうとした小隊長が砲撃に倒れ、死体が鉄条網にブラ下ったときのことである。小隊長の屍を収容しようと自から個人壕を出て這い出して匍匐前進した。その空になった個人壕に当番兵が入れ替って入った。その直後、直撃弾が個人壕に落ち、その当番兵は即死した。個人壕への直撃弾は稀有なことなのに、それを安全と思って入った人間が死亡し、身を曝した人間が死を免れたという信じられぬような現実、このような多くの深刻な体験の中で強運により生き残った人間の一人に対し平和の尊厳さを、死んだ戦友が叫び教えているとさえ考えられて沈痛した。平和裡では理解を超える「生き残った者の負い目」ともいうべき心魂さえ宿った。

航行一週間。昭和二十三年三月広島県大竹港に上陸、故郷に向いながら「帰ったら農耕一本で生きよう」と決めた。桜の蕾もふくらみはじめていた故山、おだやかな顔で農民を見つめている石仏の故郷に生きて帰れるだけでも十分と思えた。それは自己人生の「一つの終極」であった。

列車は煤煙を吐いて西進した。車内の人間の挙措動作、顔つきから推して日本が戦後の混沌状況にあるのが直観さ

れた。

本業として農具を手にしたのは始めてのことだった。周囲の人々の純情、素朴さは戦争を通して失なわれていなかった。その温かさが帰国した大尉を包んだ。一時は生活のきびしさが身に迫ったが、それを種々の生活方策で乗り切れたのは、この同郷の人の共同体的温情に励まされたからであった。

いま猫額大の耕作地と自認している五反歩の水田と二町五反歩に栽培している一千本余の密柑の手入れと杉、桧の若木植樹に日を送っている。近くには条理の学を唱えた三浦梅園の住居跡もあり、その梅園につながりのある夫人と往事を語り人間、人生を見つめている。過疎化しつつある所で、ひたすら農業一本に打ち込んで生活を楽しんでいるかのようだが、脳裡には人間は完全理想状況下で終着駅を見ることは不可能ではないか、との観照もある。

人、或いは「同じ状況下なら、俺も脱走し戦っただろう」というかも知れない。だが、自己犠牲の心奥を察せず傍観者流の口舌に対しては「大法螺吹きが、ロードスという島で大跳躍をしたと得意気に吹聴した。この人物に対し、それなら、いま眼の前で跳んで見せて欲しい。ここがロードスだ、ここで跳べ、と人は迫った」との寓話で答えるだけで十分であろう。死者は死者に任せ未来の仕事にいそむ他ないのだ——こうした元陸軍大尉兼利俊英氏の感懐が、この汚濁した世に自からを汚したくない、という生活ともなり、日常性となっている。

人間と歴史の係わり合い。幻想を画いてはならぬ、という歴史の教訓を肉体で得たものが、その日々の姿となっているとも言えるだろう。

付記

ベトナム解放戦争は民族の自決、政治的独立、国家的独立、平和民族国家の達成にあった。戦争を侵略戦争と解放戦争に区別し、戦争を通じ解放へ、というパターンの中の戦争であった。

一九七六年四月、ベトナム社会主義共和国成立までの戦争、解放達成について外部から第三者が「ベトナム人はよく戦った」と賞賛するのは容易である。また、その長期に亘る困難な戦争目的遂行に双手を挙げて感動するのも人間的であろう（共和国はトンキン、アンナン、コーチシナの各特殊性を認める連邦共和制を施行しなかった。これがアンナン、コーチシナで不満を買い、ついで難民統出の一因となっていると、言えないだろうか）。ところで、ベトナム戦争に限らず戦争一般にも当てはまることだが、この平和甦ったのを味う人間が古言の「平和を欲するなら戦争を知れ」という言葉を噛みしめるのを怠っている事態に出会う。戦いと人間のあり方、過去の大きな生きた歴史に対し意外に無関心なのである。

戦う人間、そこに視座を移すとき現実には戦う人間を見得るし戦争の実体が身に迫り、平和の意味の重さが身につくのではないか。戦争には戦場という具体的な場の呈示があり、そこでは死を前に控えた人間がいる。そのことに視線を注ぐことを忘れ観客席から映画を味うような気で評するのでは人間の心を喪失した戦争観になり易い。電算機は動員数、火器調達などを直ちに計算し解読してくれるがこうした機械的な読み方では戦う人間、民族の心は分らずじまいだろう。これでは弱肉強食の論理が残るだけで侵略される心、加害と被害の心を不要とし、氷のような解答が出るだけになる。

もとより自己体験のない戦争・戦闘については追体験する術もない、という口上もある。それでもなお平和を愛するなら、戦いの実相を知ろうと努め、資料、記録に関心を寄せるのを忘れる筈はないと思う。それを素通りして理解し切った気どりでいるのでは「戦争と平和」についての現実的理解を乏しくするのではないだろうか。その結果は、

戦争と平和についての発想を観念の中だけで完結させている人間の口調となってくる。底辺の人間を知らず底辺社会を知悉していると同様な錯覚的感覚となるだろう。この「平和」と「戦争」双方を見つめ重ねる研究が必要なのは、いま現実に軍隊が存在すること、その軍隊の中に生きている人間がいること、つまり軍隊社会があることから言い得ることである。

平和を願いつつ戦争から学ぼうとすれば、軍隊と戦争とは一見相似て、その機能は区別せねばならぬ、ということを知るだろう（この点については作家の伊藤桂一氏も述べられている）。追体験は不可能に近いかも知れないが、戦後、三十六年にして、実体を知ろうとする気構えさえ喪失している平和愛好者の姿を見受ける。卑近な例では「将校は後方で命令、指示を与えればよいのだろう」と、したり顔に言う者もいる。戦場には第一線と後方があり、第一線では下級将校、下士官、兵は同列の場に置かせられる。後方になれば下士官、兵でも死に直面しない生活が送れるのである（小孤島などは一応別とする）。軍隊を士官、下士官、兵の垂直線に画して見る単純な方式では、人間を機械論的図式で見ることにつながるだろう。将校にも特権者と非特権者の区分があるのを理解できぬだろうか。

そうでなく、生きた「人間」が戦場（戦争）に居ること、そのときの人間心理に思いを馳せることなく戦争、つれてベトナム戦争を批判することに対し、私は甘えの中から物を見る人間を感じる。平和に酔い痴れた人間形成を見る。実体に迫る気概がなく、過去の苦痛、人間体験から物を学ぶ勇氣さえないのを感じる。論理の完結だけで十分とする観念を読む。ベトナム戦争は、こうした甘え構造の中の人間では達成し得ぬことを貫徹した戦いだった、と思わざるを得ない。

また外国軍隊の参与について考究するとベトナム戦争において集約されたのは、この外国軍隊の力を背景とした政治、政権の空しさである。これは記述したベトナムにおける義勇兵の問題ともからんでおり、ここには悲劇を誕生さ

せる苛酷さがある。ベトミン投入者の体験は日本の対外戦に続く戦争体験であった。そこに平和の問題、独立指向を抱えた人間の足跡がある。そこには、とりも直さず「戦争」と係わりなくては過せなかった一日本人の姿であり、かつ具体的な戦争と人間、平和の問題提示が潜んでいる。

さらに軍隊社会についていえば、官僚制の問題と切り離せぬものがある。これは今後、ますます度合いを強めることだろう。M・ウェーバーは「……膨大な領土を擁する国家の恒久的平和維持のためにも、はるか遠方の敵、とくに、海の彼方にある敵と戦火を交えるためにも、是非必要な常備の職業的軍隊の創建は、官僚制的軍隊形式をまっぴらから始めて可能だったからである。特有な軍事上の規律や技術的訓練もまた、通常、すくなくともその近代的な水準の高さでは、官僚的軍隊においてのみ完全に展開されるのである」（阿閉・脇訳「官僚制」四七頁角川文庫版。昭和四十三年二月刊）と述べ、また近代国家軍隊について「……近代の大衆軍となると、これは、たしかに、どこの国でも名望家の権力を打破する手段であったには違いないが、それ自身けっして民主化の能動的な梃子ではなく、単にその受動的な梃子たるにとどまった。むろん、このさい、古代の市民軍が経済的に自己装備に基づき、近代軍は官僚制的な需要充足に基づいていたということが、影響しているのである」（同上五六頁）と講じている。

（旧日本軍については村上一郎『日本軍隊論序説』——昭和四十八年十月、新人物往来社刊——は民族的な意味を含め歴史と実感を踏まえ説いている一文で、小状況に埋没した批評とは異なる。近代国家の常備軍についてはアダム・スミスの論を重視しており、小才子、利口な人間を叱っている背骨を感じる）。

また何といおうとも軍隊社会が存在することは軍事科学の必要性の認識につながる。平和国家を目指す限り軍事科学は必要だといった見地は乱暴な観念論であろう。逆に平和を望むならば、一段と、その討究が必要になるということを考えざるを得ない。戦法についても日本ではクラウゼヴィッツ「戦争論」について原著者が重要視した市民の

存在意識を取り払って解釈、戦術技術に適用したことも猛省の材料となる。

なお平和研究は一九六〇年代から以前に比べ強く進められた研究領域だが（日本では世界平和七人委員会―大河内一男、湯川秀樹氏ら六名）外国ではイギリスの国際戦略問題研究所、スエーデンの国際平和研究所などがある。この平和研究に当たっても、戦争発生条件などのほか、戦いに投入される「人間」を見つめなければ、議論は機構論などで終るかも知れない。平和研究の場でも「戦争を知れ」という言葉に人間の歴史体験の重みを感じるなら、軍隊の存在と人間を視野に入れた科学的な軍隊社会学を必要とすることを忘れてならぬだろう。

最後に日本の知性の弱さは敗戦時と現在と大差ないのではないか、を反省する。それは丸山真男氏が言及している「実のところ日本政治の最頂点に位する人物の責任問題を自由主義者やカント派の人格主義者をもって自ら許す人々までが極力論議を回避しようとし、或は最初から感情的に弁護する態度に出たことほど日本の知性の致命的な脆さを暴露したものはなかった。……現に終戦の決定を自ら下し、幾百万の軍隊の武装解除を……遂行させるほどの強大な権威を国民の間に持ち続けた天皇が……無責任であるなどということは、およそ政治倫理上の常識が許さない。……必ずしもロボットでなかったことはすでに資料的にも明らかになっている。……天皇のウヤムヤな居残りこそ戦後の『道義頽廃』の第一号……」（『戦争と戦中の間』一六〇―一六〇一頁。一九七七年二月、みすず書房刊）の一言で、この批判は真剣に考えさせるものを含んでいる。

一方現在、民主主義者を自認する者が自己言動にどれだけの責任を具有しているか、に突き当たる。自己主張を貫くことに懸命な人間が得てして、その責任について集団に解消するのには苦々しさを伴う。その解消が伴うから結果責任のない言動となり得る。それが無意識下に指導者意識と混交したとき、唱導する当人の実像は実践的主体を欠いた人間像を呈する。また戦前の上官無膠論を貫徹し得た天皇制旧軍隊とその中で偏狭さが許された人間群像と同じ精

神土壌の上に立っているのではないかと疑いたくもなる。現在の人間荒廃が戦争責任追及の不徹底にあったのは事実としても、同じ土壌の中の人間が歴史事実、人間体験に学ばず、自己を絶対真理の具現者と見立てる感覚、または人間の苦しい歴史的実践体験を学ぶことを忘れた感覚と態度では他を責めるのに迫力を欠く。ただ民主主義のレッテルを自から貼っているだけだ、とさえ思うに至る。

観念は一聞すると見事だが独善的で、人間不在ということである。これに対応する時、ベトナム投入者の投入決意に、自己責任の問題が伏在しているのを見落したくない。弁々たる人士に対し、その人間的誠実さに心打たれる。

本文を綴りつつ以上のようなことが念頭から去らなかったことを付け加えた。(昭和五十六年七月七日)

(注) なお兼利元大尉は昭和二十年八月十日付けを以て少佐に昇任する筈であったが、敗戦前後の事情から有耶無耶になり、更にベトナム投入もあって正式発令を受けずに済んだのだから、実質的には元陸軍少佐と呼称するのが正しい。もっとも、昇任のことなど、氏にとっては過去を現在に引き戻すの愚と映ることで、全く問題外のことであろうが、正確を期するため書き足した。

また五八頁記述の世界平和七人委員会委員湯川秀樹博士は昭和五十六年九月八日逝去された。

参 考 文 献

- 貝島兼三郎「インドシナの民族革命」(潮流講座経済学全集第二部。昭和二十四年二月、潮流社刊)
丸山静雄「ベトナム戦争」(ドキュメント現代史、昭和四十七年十一月、平凡社刊)
渡辺 光「世界地理3 東南アジア」(昭和五十一年五月、朝倉書房刊)
桜井・石沢「東南アジア現代史Ⅲ」(昭和五十二年九月、山川出版刊)